

創基 200 周年

# 山口大学の 来た道

# 5

# 新制大学としての

# 歩み

## 目次

- 1 総合大学へ向け始動
- 7 統合移転
- 13 〈トピック〉闘争の時代
- 15 各学部の発展
- 27 国立大学法人山口大学へ
- 32 〈トピック〉 山大ブランドの創出
- 33 全学教育研究施設の整備
- 39 成長をつづける山口大学
- 41 〈トピック〉進む国際化
- 43 活気あふれる山大ライフ
- 59 〈トピック〉大学の入り口と出口
- 61 〈トピック〉学生と共に育む
- 63 〈附録〉吉田キャンパス歴史散歩  
沿革  
学部・学科一覧  
年表  
参考資料  
山口大学憲章

昭和24年、新制大学として山口大学が誕生した。前身校となる旧高等学校、専門学校はそれぞれの歴史を背負いながら、山口大学として新たな歴史を刻んでいくこととなった。

分散していたキャンパスの移転統合、学部・大学院の改組・新設、施設整備、そして国立大学法人としての新たなスタート。変わりゆく時代にあっても、次の時代へとバトンを繋ぎ、山口大学は着実に歩みを続けてきた。

山口講堂の設立から200年。それぞれの時代で奮闘してきた先人たちの思いは、今日の山口大学へと繋がっている。

(右) 現在の山口大学吉田キャンパス  
(下) 移転初期の吉田キャンパス (昭和42年頃)

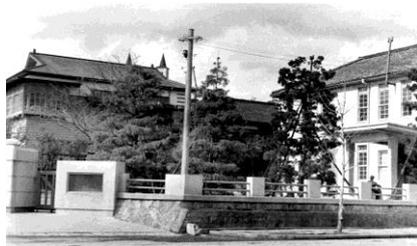


# 総合大学へ向け始動

## 最初の課題は統合整備

昭和24(1949)年、山口大学は誕生した。山口講堂以来連綿と継承されてきた県教育界の熱意と大学設置の悲願は、戦後の新学制のもとに結実し、いよいよ名実ともに総合大学へ向けての第一歩を踏み出した。

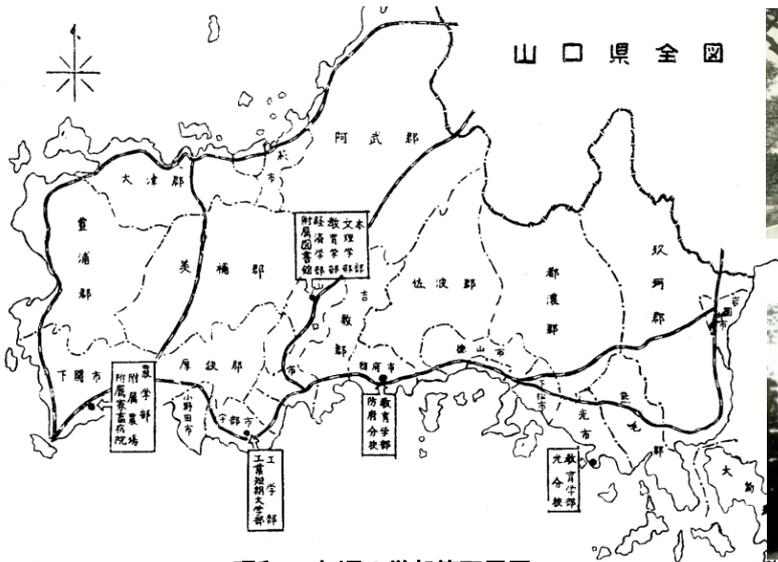
当初は各学部の母体である旧高専校から、文理学部、教育学部、経済学部、工学部及び農学部の5学部でスタートしたが、工学部は宇部市、農学部は下関市、教育学部は山口市に本校、光市と防府市にそれぞれ分校があり、新制大学の使命を果たすためには分散しているキャンパスの統合整備が大きな課題だった。



本部(山口市新道)



文理学部(昭和29年に山口市糸米から後河原へ移転)



昭和28年頃の学部等配置図



教育学部(山口市芳沢町)



経済学部(山口市亀山)



農学部(下関市長府)



工学部(宇部市常盤台)

## 旧高专校の廃校

戦前から県の高等教育を担ってきた旧高专校は、山口大学発足に伴って生徒募集を中止し、最後の卒業生を送り出した後、順次廃校になった。

- 昭和25年3月 官立山口高等学校
- 昭和26年3月 官立山口経済専門学校  
官立山口師範学校  
官立山口青年師範学校  
官立宇部工業専門学校
- 昭和27年3月 県立山口獣医畜産専門学校

最後の卒業生となったのは終戦後の混乱期に入学した学生達である。深刻な食糧難と物資不足の中、新学制の行方に不安が募る苦難の時代ではあったが、精一杯勉学に励み、青春を謳歌し、そして戦後の復興を担う人材として社会に羽ばたいていった。



官立宇部工業専門学校最後の卒業生(機械科十回)  
(昭和26年3月)

## 整備の始まり

昭和28(1953)年3月28日、山口大学として第1回目の卒業式が挙行された。また、同年6月、本部事務局が亀山の経済学部校舎から新道(現在の山口市民会館敷地)に移転し、いよいよ総合大学に向けて管理運営整備が本格的に始まった。

翌年10月には、文理学部が新制山口高等学校東校舎と敷地を交換する形で糸米から後河原へと移転した。次いで、昭和32年4月に教育学部光分校が、昭和35年に防府分校が山口の地へ統合された。

昭和30年代半ばのわが国は、池田内閣のもと高度経済成長期へ突入し、所得水準が上がるに連れて、高等教育熱も高まりつつあった。昭和38年の中央教育審議会答申「大学教育の改善について」には、主として技術革新を踏まえた理工系振興の必要性が力説されていた。



昭和35年頃の大学本部周辺図

## 学科・専攻科の新設

昭和20年代後半から30年代にかけて、高度経済成長に伴う高等教育熱はますます高まり、理工系学部を中心に学科・専攻科の新設が相次いだ。

昭和29年4月 経済学専攻科(経理経営学専攻)及び商業教員養成課程設置

昭和33年4月 工学部電気工学科設置

工学専攻科設置(機械工学専攻、鉱山学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻)

昭和34年4月 農学専攻科設置(農学専攻、獣医学専攻)

昭和37年4月 工学専攻科(電気工学専攻)設置

昭和38年4月 工学部生産機械工学科設置

昭和39年4月 教育学専攻科設置

また、学科等の新設で事務が輻輳化したため、漸次事務機構の整備が行われた。昭和35(1960)年に従来の規程を廃止し、新しく山口大学処務規則並びに山口大学各課、学部等の事務組織並びに事務分掌規則が制定された。



工業化学実験



### 昭和30年代の事務室では… <職員OBの話>

私が山大に就職したのは昭和30年代初め頃で、初任給は6千円くらいだったと思います。当時の事務局は今の山口市市民会館の所にあつて古い木造建築でした。会計課の事務処理は算盤を片手に伝票をめくりながら、帳簿に記載していました。授業料の収納や給与の支払いは全て現金で、当時の授業料は年額9千円でした。(ちなみに昭和50年は3万6千円、昭和51年からどんどん値上がりして、現在は53万5千8百円也!) 文書はもちろん手書きです。コピー機もない時代でしたので、会議資料などは鉄筆で書いてガリ版刷りしていました。現在のようにパソコンや複写機を使って簡単に大量に資料が作成できる世の中が到来するなんて想像もつかなかつたですね。

夏は団扇とタオルが必需品。それでも暑い時には机の下に水を入れたバケツをこっそり置いて、足を浸して執務している人もいましたよ。冬になるとダルマストーブで暖をとるのですが、終業時間になるとどこからか酒瓶が出現し、若手職員は百円札を持たされて、川端市場(公設市場)に干物やちくわなど肴を買いに走るのが常でした。ストーブを囲んで小宴会が始まり、仕事のこと、大学のことはもちろんですが、将来の夢や人生談義など四方山話を上司や先輩から聞かされ、時には発破をかけられたこともありますが、娯楽の少ない当時としては楽しみの一つでした。



文理学部事務官等の年始め(昭和35年)

# 教養部設置と文理学部改組

戦後教育改革の一環として生まれた新制大学の一つの重要な特徴は、専門教育科目のほかに学部、学科、専攻を問わず全学生に共通する一般教育科目が必修として設定されたことである。一般教育の目的は、(1)民主社会に適合した市民的教養の教授・啓発、(2)専門教育に繋がる科学的かつ総合的な判断力の育成にある。一般教育の必修単位は、専門教育76単位に対して48単位と定められた。その内訳は、人文科学、社会科学、自然科学の各分野から合計36単位、外国語8単位、保健体育4単位である。

開学当初、本学の一般教育は他大学と同様に文理学部の教官が中心となり、各学部から応援を得て実施した。履修期間は初めは1年半だったが、専門教育期間との関係や学生の年度途中での学部(特に山口地区以外)移行にまつわる問題点などが指摘され、昭和27(1952)年より1年半の建前をとりつつ、実質的には1年に短縮された。

その後、高度成長期に入った昭和35年前後から理工系を中心とした大学拡充と学生増募の要請が高まり、一般教育の整備と学生指導体制の強化、並びに文理学部の改組問題が全国的に話題に上るようになった。こうした気運の中、文部省は中央教育審議会の答申に沿って、昭和38年、国立学校設置法を一部改正し、教養部の設置と文理学部改組をセットで実施する方針を打ち出した。本学では同年12月に文理改組委員会を設置し議論を重ねたが、学部構想と絡んで改組案作りは非常に難航した。

結局、昭和41年4月、独立した組織として教養部が発足した。文理学部から27名、工学部から1名、教育学部から1名、他大学から1名の合計30名(定員36名、欠員6名)の教員が移籍し、事務職員19名とともにスタートしたが、最初の1年間は文理学部に同居した。また、文理学部組織は理学科を拡充して続行することとなった。

各学部が異なった生い立ちと歴史を持ち、相互の壁が厚い本学の場合、教養部の設置は、総合大学としての一体感を涵養し、単科大学の集合ではなく真の意味で総合大学となるための礎石として重要な意味があった。

※その後、教養部は大学設置基準大綱化の流れにより、平成8(1996)年3月末、30年の歴史に幕を閉じ、教官は各学部に分属した。



第4回入学式(昭和27年)



文理学部校舎(後河原、昭和36年頃)

# 工業短期大学部の設置

昭和26(1951)年、学校教育法の一部改正により短期大学の設置が公布された。

戦後の復興を急ぐわが国において中堅技術者養成は急務であり、工業都市として発展の途にあった宇部市では、地元企業等で働く勤労青年を対象とした夜間工業短期大学の開設が望まれていた。高度な工業技術を習得し、地方産業の発展に寄与する人材を育成することを目的とし、設置場所は教官陣容のそろった工学部に併設する計画で、費用の一切(4,500万円)を市が負担するという条件の下、宇部市は国や県、山口大学に設立を要望した。これを受けて松山基範学長は、昭和27年10月に文部省へ設置認可申請書を提出し、翌年2月大学設置審議会委員による実地視察を経て、同年8月1日に開校した。

短期大学部は夜間授業を行うものとし、修業年限は3年、機械科と工業化学科(定員各学科40名ずつ)の2科で発足した。その後、昭和40年に電気科、翌41年に土木科、昭和49年には情報処理工学科が増設された。経済的理由で大学進学をあきらめざるを得ない優秀な学徒の受け皿でもあり、卒業生は産業界の発展に大いに寄与した。

※工業短期大学部は、平成5(1993)年3月末、工学部への改組統合により40年の歴史を閉じた。



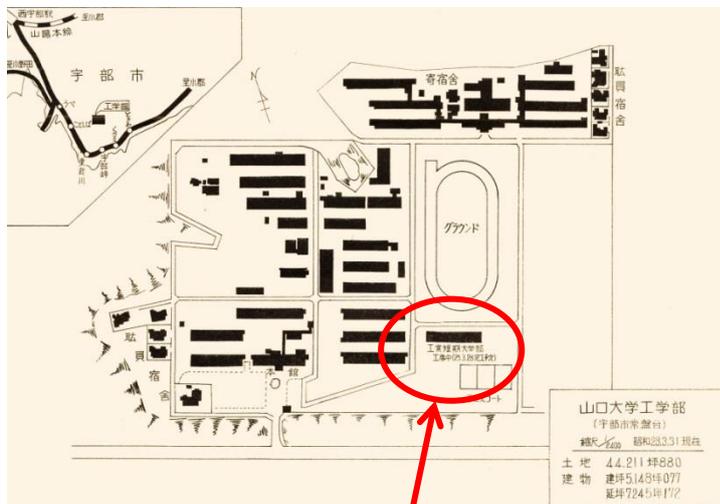
工業短期大学部校舎

2階建て赤瓦の洒落た建物で、現在の先端研究棟辺りにあった。



竣工間近の管理棟を視察(昭和31年)

左から4番目が松山基範学長



工学部平面図(昭和28年) ※ここが工業短期大学部の校舎



堀内熊男主事(昭和40年頃)

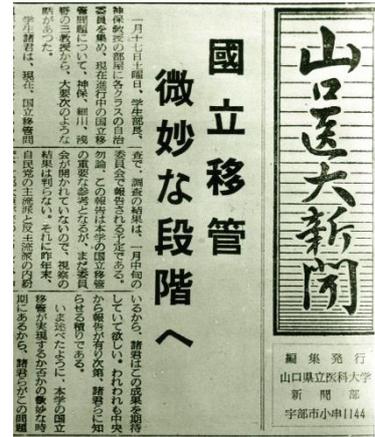
昭和36年から4年間と昭和44年からの2年間、主事として、学科の新設や専任教員の充実を目指し奔走し、工業短期大学部の発展に尽力した。

# 山口県立医科大学の国立移管

山口県立医科大学(旧制)は、戦後も国立移管の道を選ばず昭和27(1952)年から新制度による医科大学として地元の援助を受けて独自の道を歩んでいた。マスタープランに基づき、附属蛋白質化学研究所及び附属産業医学研究所の設置(昭和27年)、大学院医学研究科の設置(昭和33年)、附属病院の整備拡充など、着々と整備されていった。しかし、経営は赤字が続き、県にとって財政負担は極めて大きいものがあった。また、この時期山口県は自然災害に重ねて見舞われ、昭和31年には地方財政再建法の適用を受けるに至ったため、県議会では県立医科大学廃止の議論が持ち上がるようになった。



(上)山口県立医科大学正門第1棟(昭和36年頃)



(右)国立移管について伝える山口県立医科大学の新聞(昭和34年)

研究費や運営費は大幅に減額となり、大学としてはもはや国立移管に活路を見出すより途はなく、国に対して度々の陳情を行った。その結果、県が一定の施設整備を行った後に移管するという厳しい条件の下に許可を受け、昭和39年から4ヵ年計画で移管を完了した。

ここに山口大学医学部としての新たな歴史がスタートしたのである。

なお、国立移管に関するもう一つ重要な論議として、山口大学に併合されるか、国立の単科大学として発足するかの決定があった。当時、国立の単科医大は全くなかったこと、山口大学が併合を要望したこと、医大側も単科大学にこだわらなかったことで、併合の線がまとまった。



山口県立医科大学キャンパス(昭和39年頃)



山口大学医学部第1回卒業生(昭和43年)



医学部同窓会の「霜仁会」が創設されたのは、山口県立医科大学時代の昭和29年。宇部市に縁の深い霜降山の「霜」と、医は仁術の「仁」とって「霜仁会」と名付けられた。

# 統合移転

## 2つの契機

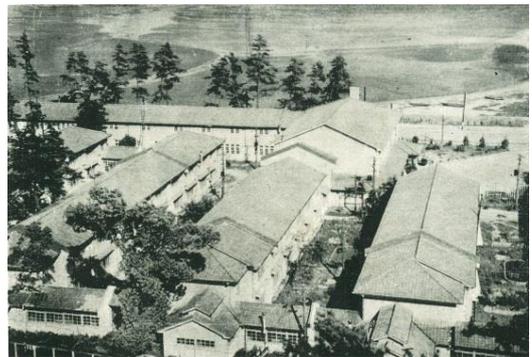
社会が急速に経済成長を遂げる中、本学では昭和39(1964)年9月の評議会で下関市長府の農学部と、旧山口市街地にある本部、文理学部、経済学部及び教育学部を山口市平川地区に統合移転する方向を決めた。この決定に至る契機は2つあると考えられる。

### 1. 農学部の移転計画

農学部は山口・宇部地区から離れているため教育や運営に不便であり、各施設が分散している上、進駐軍の施設の使い回しで建物が老朽化していること、振動・騒音が激しく、農場は地質・土性が極めて悪いこと等の理由から、昭和27年の教授会において他の適地への移転の意向を打ち出し、移転調査委員会を設置した。

移転先として、①防府地区(教育学部防府分校跡及び民有地)、②山口地区(平川、大内各方面、県営グラウンド)、③宇部地区の3か所が候補に挙がり、数年かけて調査が行われた。その結果、山口市平川地区が大学本部に近く、教育・研究上有利であること、地域農業の研究・開発上最も適した立地であるとの結論を得た。また、地元平川の農業委員会・平川振興会が誘致を積極的に応援し、山口市議会でも「学都山口」建設を目標に誘致運動を展開した。昭和37年6月の評議会において平川地区を第一候補地とすることを大学として決定し、翌38年には文部省の了解を得た。

県内では、山口国体開催に向けて急ピッチで整備が進んだ時期でもあった。



農学部校舎(下関市長府)



統合移転前の吉田地区

### 2. 文部省の示唆

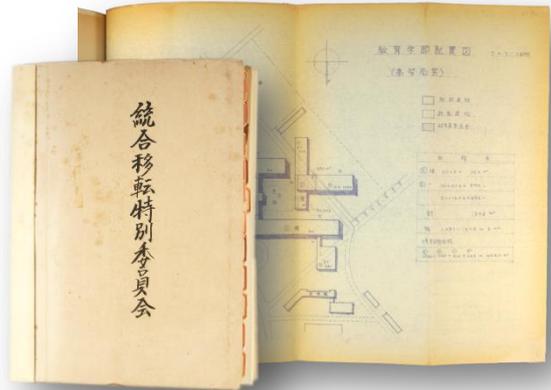
昭和39年に入り、文部省からは農学部の移転だけでなく、旧山口市街地にある文理学部、教育学部、経済学部も狭くて将来性がないので全学的な検討を要するとの意見が示された。これを受けて本学では、総合大学としての整備・発展を見据え、農学部移転計画から在山学部全部の統合移転へと計画を一気に拡大した。

この背景には文部省の進めていた施設統合・移転計画があり、特に第一次ベビーブームの世代が18歳を迎える昭和42年頃までには学生数の増加を可能とするための整備が急務だったことが上げられる。

# 移転用地の確保

昭和40(1965)年1月、統合移転に向けて用地買収と造成工事が本格的に始まった。移転先の広さは約70万㎡で、旧山口市街地にある本部地区の4.5倍にあたる。この土地購入に約4億円必要だったが、文部省から初年度配分された予算は1億4千万円だったため、本学は年次計画で支障が生ずることを危惧し、山口市に土地の一括購入を依頼した。

山口市は協力を惜しまず、同年2月、市議会に山大統合移転対策特別委員会を設置し、3月に財団法人山口市開発公社を設置し、4月から事業に着手した。並行して平川地区でも対策協議会を結成し、統合移転の推進に協力した。土地所有者と買収価格で折り合いがつかず難航した時期もあったが、地元住民との懇談会で理解を得て、用地買収は昭和41年4月に終了した。当初の3年計画が、開発公社・地区住民の努力と協力により、最速の約1年で鍬入れに漕ぎつけたのである。



統合移転関係の書類綴



大学周辺道路(昭和41年頃)

第3号 昭和42年4月15日 山口大学学生部だより (2)

**吉田地区統合移転**

その経過と未来像

山口大学の吉田地区統合移転は、山口盆地を貫流する樺野川の南、市中心部より約五キロの吉田山麓一帯の田園風景を一挙に変貌させて、いま建設工事が着々と進められている。山口大学十九年の歴史をくつきりと画すること、統合移転を、現時点に立って、その過程をふりかえり、きょうの胎動のうちにあすの姿を探ってみよう。

**本学移転の経過**

タコの足大学の呼称を解消し名実ともに統合大学にしたいという山口大学発足以来の夢は、当時下関市にあった農学部が山口市移転計画がきっかけとなった。昭和三十三年老朽化し実験もままならぬ農学部の移転候補地として山口市平川があげられ、試験田による土壌調査の結果農学部としての立地条件に最適であることされ、山口市議会も学部山口建設の一翼に農学部誘致特別委員会を作って運動を続けてきた。

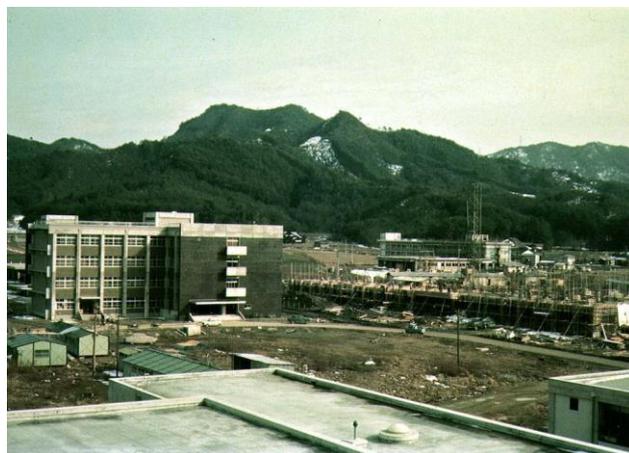
昭和三十八年には所在市との折衝も解決して農学部の山口市移転が本決りとなった。ところが山口市の三学部も敷地が狭く現在地では将来の発展に対応する施設の整備拡充も望めないところから、この際これらの学部もあげて平川吉田地区に統合して、総合大学にふさわしい施設と環境を作ってはどうかとの意見がもち上り、昭和三十九年十一月の評議会でも正式に大学の態度を決定、昭和四十年一月には用地買収、道路水道施設建設などについて山口市に協力を要請するに至った。

当初計画の概要は、総工費約三十五億円で七〇万㎡の敷地に、昭和四十年より農学部施設と教養部の建設を始め、逐次、文理学部、図書館、本部、経済、教育学部を建設し、四十五年までには全学の移転を完了することを予定、文部省も土地購入費四

# 統合移転の進展

昭和41(1966)年1月17日、農学部・教養部建設用地の地鎮祭と、学長による鍬入れにより移転工事が開始した。5ヵ年計画で事業費総額は28億円が見込まれていた。しかし、予算の関係や学園紛争の影響により、実際の建築完成・移転には8年間を要した。

- 昭和41年 10月 農学部移転
- 昭和42年 2月 農学部附属家畜病院完成
- 3月 教養部移転
- 昭和43年 5月 湯田一山大間の新県道完成
- 10月 文理学部移転
- 11月 事務局・学生部移転
- 昭和45年 3月 附属図書館落成
- 昭和47年 8月 教育学部移転
- 昭和48年 1月 経済学部移転
- 11月 統合移転記念式挙行



農学部と建設中の文理学部(昭和42年)



吉田キャンパス(昭和42年頃)

左から体育館、教養部、農学部、手前に榎野寮が建っている。



道路整備



体育館前の道



新築の教養部校舎へ向かう新入生(昭和42年4月)  
新体育館で移転後最初の入学式が挙行された。



正門付近(昭和44年)

# 移転完了

昭和48(1973)年1月、経済学部の引越を最後に統合移転が完了した。江戸時代末期の文久元(1861)年、山口講習堂が亀山に移って以来、学都山口の中心として112年も続いた伝統の学舎に別れを告げ、万感の思いで新キャンパスに移転したのだった。ちなみに経済学部では亀山校舎と統合移転の記録を映画として残した。

統合移転に係る最終的な記録は以下のとおり。

土地面積	705,982㎡	土地購入費	402,492千円
建物延面積	74,095㎡	事業費	3,354,219千円

昭和48年11月18日、統合移転記念式典が第二体育館で挙行された。中村正二郎学長は、土地を提供していただいた地元平川地区百余名の地主の方々、県・市当局、文部省当局に感謝するとともに、統合移転に寄せられた関係各位の好意に報いるためにも大学本来の使命である教育と研究に一層精進する決意を述べた。



新築の経済学部校舎(昭和48年)



統合移転完了を祝して万歳三唱

## 遺跡の上に立つ吉田キャンパス

新キャンパスは、弥生時代から中世を中心に栄えた吉田遺跡の上に立地している。昭和41年、統合移転に伴う構内造成工事等の際に石器や土器が出土したため、調査団を組織して遺跡の調査・研究を行った。これが現在の埋蔵文化財資料館に継承されている。

発掘調査は建設予定地の大部分に亘り、その結果、吉田遺跡が縄文時代晩期から弥生・古墳時代はもちろんのこと、古代から近世までの複数の時代にわたる集落の遺跡であることが明らかになった。特に、第一学生食堂の南西側では弥生時代後期から古墳時代にかけての多数の住居跡や遺物がみつき、吉田の地に一大集落が営まれていたことが判明したため、公園にして遺跡を保存した。

なお、大学所在地の地番は、当初「山口市大字平井」だったが、地元と協議の結果、平安朝以来の伝統である「周防国吉田村」の名を残すこととなり、昭和41年1月1日より「山口市大字吉田1677-1」とした。



第一学食南西の遺跡保存公園

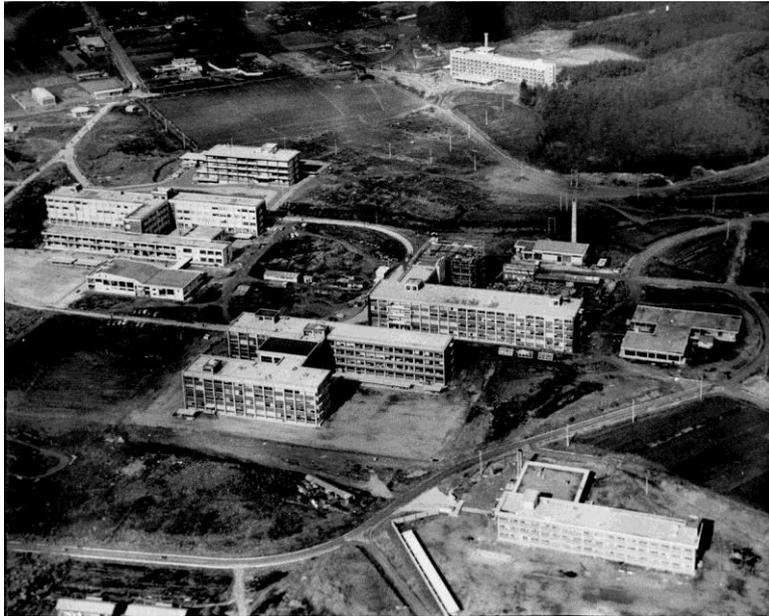


統合移転計画時の吉田地区配置図(昭和40年頃)



統合移転完了時の吉田地区配置図(昭和48年)

## 航空写真で見る吉田キャンパスの移り変わり



**昭和43年末頃**

教養部(左)、事務局(左上)  
文理学部(中央下側)、  
農学部(中央右側)  
吉田寮(右上)・榎野寮(右下)が  
完成しているが、教育学部・経済学部  
や図書館はまだ建っていない。

1968



**昭和48年統合移転後**

教育学部・経済学部・図書館・第二体  
育館・第二学食・職員宿舎等が建設さ  
れ、課外活動施設や校内道路などの  
環境も整備されてきた。

1973



**現在(平成26年)**

統合移転から40年余り。  
大学の発展に伴って国際交流会館や  
総合研究棟なども新設され、総合大学  
に相応しいキャンパスとなった。  
また、ここ数年かけて統合移転時の建  
築物に耐震改修が施され、各学部は  
装いも新たにリニューアルオープンし  
たばかりである。

2014

# 闘争の時代

## TOPIC

### 大学紛争の萌芽

1960年代後半から70年代初めにかけて、全国の大学で学生運動が活発化した。本学では、昭和39(1964)年7月に、統合移転計画が新聞で報じられたことを契機として、以前から問題となっていた学生寮食堂の炊婦公務員化や生協の設立などに統合移転問題が加わり、学生の運動が次第に高まりを見せるようになっていた。

昭和42年から翌年にかけては、あちこちの大学で大学紛争が激化し、それに呼応するように本学でも学生の運動がさらに激しくなる兆しを見せる中、昭和44年、ついにその運動が爆発した。

#### 大学紛争の主な動き

- 昭和40年 1月 慶応大学で学費値上げ反対闘争
- 昭和41年 1月 早稲田大学闘争で全学ストライキ
- 昭和42年 2月 明治大学で学費値上げ反対闘争
- 10月 第一次羽田闘争
- 11月 第二次羽田闘争
- 昭和43年 1月 佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争
- 2月 中央大学で学費値上げ反対闘争
- 5月 日本大学で大規模デモ
- 6月 東京大学機動隊導入
- 昭和44年 1月 東京大学安田講堂攻防
- 4月 沖縄返還闘争



学生運動への大学当局の干渉を伝える山口大学新聞  
(昭和43年5月)



経済学部正門付近  
(昭和46年)

### 大学の自治をめぐる

昭和44年2月、「山口県警察官友の会」が発足したが、その会の発起人に市川禎治学長が名を連ねていた。全国各地の大学で、紛争の解決に警察官を導入していたことが自ら大学の自治を破壊するものであるとして大きな問題となっていた時期でもあり、このことは本学での運動に火をつける形となった。

学生側は、学長の警察官友の会への入会に対する抗議とともに、大学側へ学長の言動に対する責任及び態度を明確にすることなどを求めた。市川学長は学長辞任の意向を伝え、大学側に了承されたものの、学生側は学長の責任追及のため白紙撤回を求めた。学生側と大学側で何度も交渉を重ねたが、結局市川学長は会を脱会せず、辞表は受理された。混乱の中、新年度を迎え、4月9日、ついに本部建物が学生により占拠封鎖される事態が生じた。

4月14日、15日に大学側から学生側へ各種要求に対する回答文を発表することで、一応の決着は見たが、この後、4月に教養部本館封鎖、7月に経済学部ストライキ、12月に文理学部ストライキ、と紛争はおよそ1年間続き、この間、大学は大きく混乱し、教員も職員も学生も苦悩と緊張の中で過ごすこととなった。



### あの頃の学園は… <職員 OB の話>

昭和44年4月9日深夜、事務局宿直室で仮眠中にヘルメット姿の全斗連の学生が土足で座敷に上がり込み「今から事務局を封鎖する。」と私たち当直者を外に出よう強要、自分の家を荒らされるような非常に悔しい思いで外に出たことを思い出します。この日から21日間、要求の実現を求め学長室を根城に事務局を封鎖し続けました。以来46年頃まで続く大学紛争の中で、大衆団交、校舎バリケード封鎖、授業料不払い運動など行われ、同世代の私たち職員も立場の違いで事あるごとに活動学生と対峙せざるを得ない状況でした。



吉田キャンパス正門前の機動隊



ジグザグデモをする工学部生たち(宇部市中央町)  
(昭和45年)

## 制度の改革

昭和44年の大学紛争では、大学の自治の擁護と大学の民主化の推進が根底にあり、具体的な問題として学長選考方法の改正が浮かび上がった。大学では、紛争の終結を待たずに学長選考について検討を始めた。焦点となったのは、学長選考に教官だけではなく、職員や学生の意向をどのようにして取り入れるか、という点であった。さまざまな案が出されながらも、いずれも学内合意は得られず、各学部でストライキが起きる中、昭和46年2月、大学側は学長選挙を実施した。

混乱の中、力武一郎新学長が決まったが、3月には学生が本部建物を封鎖し、大学側は最終的に機動隊の出動を要請するに至った。4月に入り、ようやく混乱は落ち着きを見せ、昭和47年12月、大学側はようやく「学長選考の方法に関する基本方針案」をまとめて学内に公示した。この中で、教員、職員、学生はすべて学長候補適任者を推薦することができ、予備選挙に職員も参加することとした。

# 各学部の発展 (法人化まで)

## 文理学部

### 1949 山口大学文理学部を設置(昭和24年)

人文科学・自然科学の各分野に亘る総合的な教育や研究に重きを置き、広い基盤に立つ専門教育を行うことを目的として設置された。

糸米時代の文理学部校舎  
(昭和24年頃)



### 1954 山口市糸米から山口市後河原に移転(昭和29年)



経済学部講堂付近から望む理科棟  
(昭和36年頃)



文理学部校舎・文学部の教室と研究室  
(昭和42年頃)



本学では元々経済学部・教育学部と集合させる計画で、糸米の文理学部と後河原の新制山口高等学校東西両校舎の交換を希望していたが交渉は進まなかった。結局、昭和27年に、山口高等学校東校舎が火災により焼失したことが契機になり実現した。

### 1966 文理学部の改組と教養部の設置(昭和41年)

### 1968 山口市吉田に移転(昭和43年)



吉田キャンパスの文理学部(昭和52年頃)  
現在は理学部の校舎となっているが、文理学部時代は文学部が主として前列棟の正面玄関から向って左半分の2~4階を使用。

### 1970 理学専攻科を設置(昭和45年)

### 1972 文学専攻科を設置(昭和47年)

## 1978 文理学部を改組し、人文学部と理学部を設置(昭和53年)

高等教育の普及に対応して、人文諸科学の専門的知識を学び、かつ幅広い教養を身につけた人間性豊かな優位の人材を育成するという時代的・社会的要請に応えることを目的として、文理学部を改組し、人文学部と理学部が設置された。

### 人文学部・人文科学研究科

## 1978 人文学部を設置(昭和53年)

## 1979 人文学部棟竣工、学芸員資格課程開始(昭和54年)



考古学専攻の野外実習風景(昭和54年頃)



人文学部棟竣工(昭和54年)

## 1985 人文科学研究科(修士課程)を設置(昭和60年)

より広い視野にたつて総合的かつ精深・高度な学識を授け、学術研究の成果をもって社会の要請に応えることを目的として設置された。

### 図書館司書資格課程開始

## 1993 大講座制・コース制へ改編(平成5年)

専門性と学際性・総合性を共有して、学生の多様な関心に対応して研究と教育の有機的一体化を実現するための改組を行う。



研究室の様子



国語国文研究室による狂言



### 生涯学習

人文学部では人間と文化を探求するという学問分野を活かして、早くから生涯学習に取り組んできた。人文学部で開講の「サタデー・カレッジ」や学外に出向いて行う「公開講演会」「出前授業」など、地域の方や高校生を対象として幅広く実施し、現在も地域連携推進センターと連携し、生涯学習を推進している。



公開講座の様子(平成8年)

## 理学部・理工学研究科

**1978** 理学部を設置(昭和53年)

**1982** 理学研究科(修士課程)を設置(昭和57年)

自然科学分野の急速な発展に対応し、高度な専門的知識並びに研究能力を有する人材を養成することを目的に設置された。

**1990** 情報基礎の講座を新設(平成2年)

専門性と学際性・総合性を共有して、学生の多様な関心に対応して研究と教育の有機的一体化を実現するための改組を行う。

**機器分析センターを設置**



機器分析センター設置

**1995** 学科の改組(平成7年)

学部発足以来の5学科を、数理科学科、自然情報科学科、化学・地球科学科の3学科に改組。

**1997** 理学研究科を廃止し、工学研究科を理工学研究科(博士前期・後期)に改組(平成9年)

※工学部も関連

工学及び理学分野の融合により、新たな学際領域の開発と創造的科学技术の発展を促進する高度技術者・研究者の育成を目的に設置された。



化学実習風景



情報処理実習風景



### サイエンスワールド

一般の方、特に小・中・高生に理学部での研究を知ってもらおうとともに、科学のおもしろさ、魅力をアピールすることを目的に、平成11年から開催(初年度は「理学部先端科学フェスティバル」)。学生の企画による展示や実験のデモンストレーションなど自然科学を存分に楽しんでもらうイベントとして、家族連れなど、毎年多くの来場者を集めている。



サイエンスワールドの様子

## 教育学部・教育学研究科

### 1949 山口大学教育学部を設置(昭和24年)

戦前の師範学校による教員養成への反省から、教員養成は幅広い視野と高度な専門知識・技能を兼ね備えた多様な人材を広く求めることを目的として、教員養成は大学で行うことの原則に従い、「山口師範学校」と「山口青年師範学校」を包括し、新制の教育学部が発足した。

光分校、防府分校を設置。附属山口小学校、光小学校、山口中学校、光中学校を設置。

### 1957 光分校を山口本校へ統合移転 光分校を廃止(昭和32年)

### 1960 防府分校を山口本校へ統合移転 防府分校を廃止(昭和35年)

### 1966 養護学校教員養成課程を設置、附属幼稚園を設置(昭和41年)



附属幼稚園誕生(昭和41年)

### 1972 山口市亀山から吉田に移転(昭和47年)



移転前の教育学部(昭和42年)



吉田キャンパスの教育学部棟(昭和52年)

### 1979 附属養護学校を設置(昭和54年)

## 1987 教育実践研究指導センターを設置(昭和62年)



教育実践研究指導センター開所式

## 1989 総合文化教育課程を設置(平成元年)

少子化に伴う教員需要の減少により、教員になれない学生が増えてきたこと、及び国際化・情報化が急速に進んでいく社会情勢を踏まえて、教育界以外にも対応できるような資質をもった幅広い人材育成を目的として設置された。

## 1991 教育学研究科を設置(平成3年)

学部における教員養成教育の充実・発展を基盤とし、それとの有機的連携の上で、学校教育に関する教育科学のより深い研究と、各教科の教育内容を基礎づける科学・技術・芸術の専門的研究との総合からなる理論的・実践的力量と識見をもち、教育実践の場で教育・研究を強力に推進しうる指導的教員の養成を行うことを目的として設置された。

## 1998 課程の改組(平成10年)

課程の統合を行うとともに、多様に変化する社会で、広義で輻輳する領域の問題に対処できる人材の育成を目指し、教員養成に捉われない課程の領域を増設した。



美術の授業風景



附属光小学校での教育実習風景



附属山口小学校・幼稚園(平成10年)



附属山口中学校(平成10年)



附属特別支援学校(平成10年)  
※当時は附属養護学校



附属光小中学校(平成10年)



### ちゃぶ台ルーム

平成17年度に、「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画(取組期間 2 年)が、文部科学省の「大学・大学院における教員養成推進プログラム」に採択され、これに伴い、学生・現職教員・大学教員が協働して課題や失敗を分析・評価する省察の場として「ちゃぶ台ルーム」を開設した。



ちゃぶ台ルームの様子

## 経済学部・経済学研究科

### 1949 山口大学経済学部を設置(昭和24年)

自ら問いを見出し、解決の方策を探求する能力及び意欲を持ち、世界及び社会に貢献し得る実践的経済人を育成することを目的として設置された。



亀山の経済学部校舎

### 1954 商業教員養成課程を設置(昭和29年)



#### 創立60周年記念(昭和40年)

経済学部では、明治38(1905)年の山口高等商業学校の創立から起算して節目の年に記念式を行っている。

創立60周年は亀山の校舎での最後の記念式となった。



1973 山口市亀山から吉田に移転(昭和48年)



吉田キャンパスの経済学部  
(昭和48年)

1975 経済学研究科を設置(昭和50年)

経済、経営、法律等の社会科学の分野における高水準の教育研究を行うとともに、当該分野の高度専門職業人を養成することを目的として設置された。

1977 国際経済学科を設置(昭和52年)

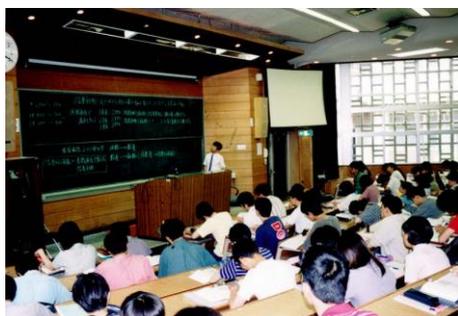
1980 経済法学科を設置(昭和55年)

1994 経済学科、経営学科、国際経済学科を大講座に改組(平成6年)

1995 経済学部商品資料館を開館(平成7年)



商品資料館竣工  
(平成6年12月)



授業風景(平成10年)



東亜経済研究所中国文化賞受賞記念  
公開シンポジウム(平成10年)

## 医学部・医学研究科

1964 山口県立医科大学を移管し、山口大学医学部として発足(昭和39年)



山口県立医科大学キャンパス(昭和33年頃)



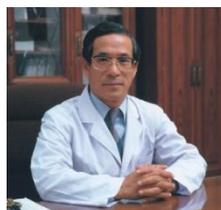
附属病院玄関(昭和34年頃)

**1967** 山口県立医科大学大学院医学研究科を移管し、医学研究科を設置(昭和42年)  
山口県立医科大学附属病院を移管し、医学部附属病院を設置

**1979** 医療技術短期大学部を併設(昭和54年)



医療技術短期大学部は、医学部附属の専修学校(看護学校、衛生検査技師学校)を母体として昭和54年10月に創設された。入学定員は看護学科80名、衛生技術学科40名。開校以来「心に愛を、手に技を」の校訓のもと、医療技術者の養成に努め、国家試験における高い合格率を誇り、看護学科1,654名、衛生技術学科773名の計2,427名の卒業生を社会に送り出した。平成12年10月に医学部保健学科に改組・転換されたが、伝統は引き継がれるとともに、より高度で国際的な人材育成を目指している。



創設準備から15年に亘り主事・部長を務められた松本昇教授



医療技術短期大学部実習風景

**1994** 創立50周年記念式典を挙行(平成6年)

山口県立医学専門学校が開設された昭和19年から起算して50周年を迎えた。



(上) 医学部本館  
(下) 医学部附属病院



小串キャンパス(平成10年)

**2000** 医学部保健学科を設置(平成12年)

**2001** 医学研究科応用工学系専攻(修士・博士)を設置(平成13年) ※工学部も関連

医学と工学との連携のもと、医療・福祉の新しい動向に即した理論と先端的医療機材の開発研究に必要な創造的な幅広い視野の人材育成を目的に設置された。

## 2003 医療技術短期大学を廃止(平成15年)



### ドクターカー

山口大学医学部附属病院と宇部市では、市民の救命率向上を図るため、平成15年8月から救急車医師同乗システム(通称:ドクターカー)を開始。



## 工学部・理工学研究科・医学研究科

### 1949 山口大学工学部を設置(昭和24年)



工学部正門(昭和35年)

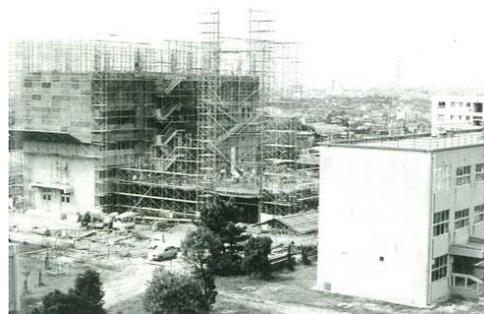
### 1953 工業短期大学部を併設(昭和28年)

### 1966 工学研究科(修士課程)を設置(昭和41年)

専門分野における理論と応用を教授研究し、精深な学識能力を持つ人材の養成を目的に設置された。



新本館(昭和45年)



建設中の電子工学科棟(昭和50年頃)

### 1990 工学研究科(博士課程)を設置、工学部全学科及び工業短期大学部を改組(平成2年)

工学研究科博士課程は、斬新な創造性と応用力に富み、先端技術の開発研究に挑戦する柔軟性と積極性を有し、研究開発のリーダーとなることを目的に設置された。

### 1993 工業短期大学部を廃止(平成5年)

### 1997 理学研究科を廃止し、工学研究科を理工学研究科(博士前期・後期)に改組(平成9年)

※理学部を参照



土木工学実験の様子



電池特性測定の様子



### ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー

平成8年、独創的な研究開発の推進および大学発ベンチャーの創出支援・育成を目的として、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(YU-VBL)が設置された。この研究プロジェクトを推進するため、超高真空装置、電子描画装置、リモートセンシング解析装置等の最新設備が備わった。



(上) 玄関付近(平成10年)  
(右) 常盤キャンパス(平成10年)



## 2001 医学研究科応用工学系専攻(修士・博士)を設置(平成13年)

医学と工学との連携のもと、医療・福祉の新しい動向に即した理論と先端的医療機材の開発研究に必要な創造的な幅広い視野の人材育成を目的に設置された。

## 農学部・農学研究科・連合獣医学研究科

### 1949 山口大学農学部を設置(昭和24年)

### 1952 附属農場を開場(昭和27年)

### 1953 附属家畜病院を設置(昭和28年)



長府時代の農学部

## 1966 下関市長府から山口市吉田に移転(昭和41年)

農学部校舎(昭和42年)



家畜病院(昭和41年)



## 1969 農学研究科(修士課程)を設置(昭和44年)

学部における一般的ならびに専門的教養の基礎の上に広い視野に立って、精深な学識を修め、専門分野における理論と応用能力を有する研究者と技術者の養成を目的に設置された。

## 1990 連合獣医学研究科(博士課程)を設置(平成2年)

山口大学、鳥取大学、鹿児島大学、宮崎大学の各農学部獣医学科が連合し広範多岐にわたる地域的課題の解決を図ると同時に高度の開発能力を有する研究者を養成し、地域の発展に寄与することを目的に設置された。



### 連合獣医学研究科設立の経緯

獣医学系の博士課程構想は、昭和63年から獣医学科が従来の4年制から6年制に移行する動きにあわせて大学院連合獣医学研究科構想が論ぜられるようになり、平成元年、西日本地区(鳥取、山口、宮崎、鹿児島大学)及び東日本地区(帯広畜産、岩手、東京農工、岐阜大学)の両地区に、それぞれ獣医学科を有する国立大学が連合して組織する大学院連合獣医学研究科博士課程を創設する構想がたてられ、平成2年、西日本地区は山口大学大学院連合獣医学研究科、東日本地区は岐阜大学大学院連合獣医学研究科が設立された。



連合獣医学研究科棟



連合獣医学研究科落成記念式(平成5年)



生態系環境科学実験の様子



生物生産科学実験の様子

## 東アジア研究科

### 2001 東アジア研究科(博士課程)を設置(平成13年)

山口大学の地理的環境と研究の蓄積及び国際交流の経験に基礎を置き、東アジアの地域特性に対する深い理解を基盤として複眼的な視野と柔軟な思考力のもとに、問題解決のための高度な専門知識を發揮し得る人材の養成、指導の高度専門職業人の養成を目的に、後期3年博士課程の独立研究科として設置された。



東アジア研究科入学式  
(平成13年)

## 連合農学研究科

### 1989 鳥取大学、島根大学及び山口大学の3大学の連合により鳥取大学大学院連合農学研究科を新設(平成元年)

鳥取大学、島根大学、山口大学の各大学院農学系研究科(修士課程)の教員組織、研究設備及び施設を連合し、一大学のみでは成し得ない広範かつ専門性の高い教育研究分野を組織し、高度な農学系の大学院博士課程の教育研究体制を作ることを目的に設立された。

# 国立大学法人山口大学へ

## 半世紀ぶりの大変革

平成16(2004)年4月、本学は全国の国立大学とともに国立大学法人として新たなスタートを切った。

それまでの国立大学は、国の行政機構の一部として運営に必要な予算や、教授会を中心とした自治の権限と学問の自由や、教職員の国家公務員としての身分等を保障されていた。しかし、1990年代以降政府は規制緩和政策と行財政改革を推進し、その一環として国立大学の法人化が構想され、平成11年に閣議決定された。法人化は大学の制度そのものを根底から変えてしまう、戦後の学制改革以来の大変革だった。



法人化にあたり教職員に挨拶する加藤学長  
(平成16年4月1日)

### <国立大学法人制度の概要>

- ① 大学ごとに法人化し、自律的な運営を確保
- ② 民間的発想のマネジメント手法を導入
- ③ 学外者の参画による運営システムを制度化
- ④ 非公務員型による弾力的な人事システムへの移行
- ⑤ 第三者評価の導入による事後チェック方式に移行



競争的環境の中で、活気に  
富み、個性豊かな大学づくり  
を目指す

本学では、法人化に対応するため、平成12年から運営諮問会議を設置し(委員10名、議長:松野浩二氏)、山口大学の在り方を審議するとともに、平成14年に法人化準備事務本部、法人化準備事務室及び法人化準備委員会を設置した。委員会は学長以下41名で組織し、目標評価部会と制度設計部会を設けた。目標評価部会は、第一期目(平成16~21年度)の中期目標・中期計画案の作成や、その前提となる本学の理念並びに長期目標の検討を行った。制度設計部会は、5つのワーキンググループに分かれ、各々組織・人事・財務・安全衛生及び病院に関する事項について検討を行った。

かつて経験したことのない出来事に、多くの教職員が知恵を絞り、議論し、力を結集して「国立大学法人山口大学」を発進させたのだった。



運営諮問会議

## 理念・目標の制定「発見し・はぐくみ・かたちにする」

法人化に先立つ平成12(2000)年4月、本学の「理念と目標」が制定された。原案の作成は、廣中平祐学長を座長に45歳以下の若手教官によるものである。「大学に入学する若い人たちに語りかけたい」という廣中 学長の思いをもとに、わかりやすい言葉を使いつつ研究者にも通用する高度な内容を持つものとなった。発見するものは何か、それは「夢」であり、その夢をかたちにしようという案に議論を重ねて、広く深い内容に発展した。すべて動詞を使い、未来に広がる言葉になっているのが、本学の理念・目標の特長である。

さらに、平成19年2月には「山口大学憲章」が制定され、学生・教員・職員の三者が一体となって理念の共有と目標の実現を目指すこととした。



正門に刻まれている理念

## 新シンボルマーク

大学の理念・目標制定を機にシンボルマークも一新された。平成13年度から本学のUI(University Identity)を表現するVI(Visual Identity、シンボルマーク、ロゴマーク等)の制定を広報活動専門委員会が中心となって作業を進め、平成16年1月、新シンボルマーク等を制定した。

シンボルマークは、未来をまっすぐに見据えた顔を表現し、個性を大切にしたい教育・研究を育む学問の芽は世界に向かって大きく開いている。自然をイメージさせるシンボルカラーは、大学の実直さと安心感を表現している。



銘板の除幕式

## 新たな挑戦

### 運営組織・役員

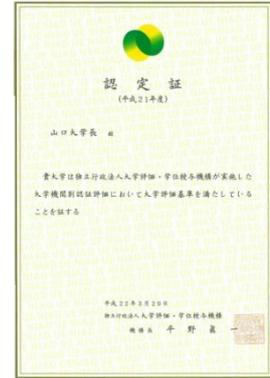
本法人役員として、学長以下理事5名、監事2名が置かれ、大学の重要事項に関する審議は役員会(監事を除く)で行うこととなった。

学長を補佐するための副学長も置かれた。法人化時は、企画広報・人事労務・財務施設・教育国際・学術研究・学術情報の各担当6名でスタートした。このうち4名(学術研究及び学術情報担当を除く)が理事を兼務し、学外からも非常勤の理事を1名迎えた。その後、組織の見直し等により、現在は副学長9名の体制となっている。

また、法人の経営に関する重要事項は学外有識者を含めた経営協議会で審議し、教育研究に関する重要事項は教育研究評議会で審議することとなった。

## 評価

大学は、教育研究等の状況について自ら点検・評価し、その結果を公表することが義務付けられた。平成16年度には、第三者から教育研究等の状況について定期的に評価を受ける大学評価制度（認証評価及び国立大学法人評価）が導入され、自己点検評価活動に基づく継続的な質的向上に一層の責任を負うとともに、その結果の公表により社会からも評価を受けることとなった。本学では平成18年度に大学評価室を設置し対応している。



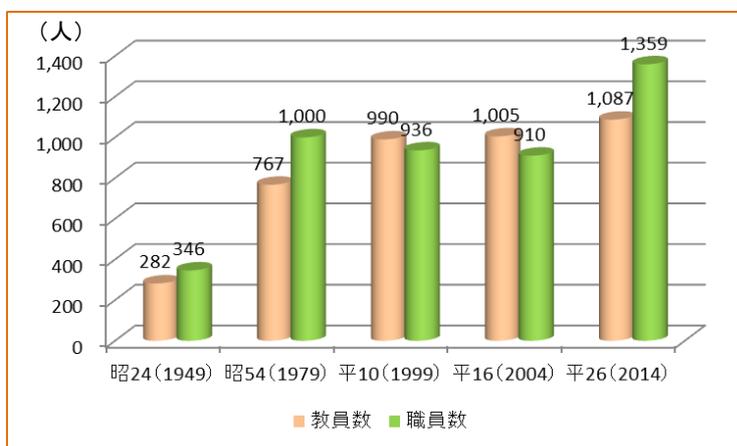
(右) 大学評価基準を満たしていることを証明する認定証

## 組織体制の変化



## 就業規則・安全衛生

教職員の身分は、国家公務員法や人事院規則等の国家公務員に適用されている規定が適用されなくなり(非公務員化)、労働基準法や労働安全衛生法等に基づいて国立大学法人が自主的に就業規則を定めることとなった。学長と過半数代表者による労使協定締結や産業医の配置、職場巡視など、教職員の安全衛生が強化され、教員の勤務時間は裁量労働制が導入された。



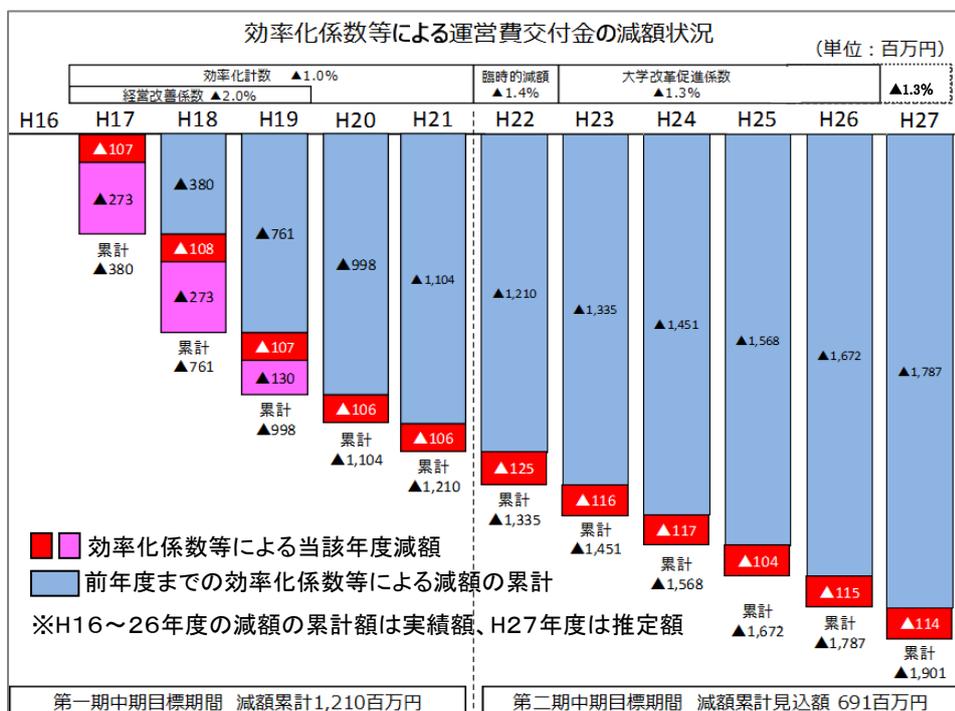
### 教職員数の推移

教員数は増加の一途であるが、職員数は昭和50年代後半をピークに減少が続いた。

平成26年に上昇している要因は、附属病院が平成18年度から実施している「7対1」の看護配置基準(患者7人に対して看護職員1人を配置する体制)によるものと考えられる。

## 財務会計

大学の運営費を国から全面的に配分される官庁会計方式(国立学校特別会計)から、企業会計を原則とする会計制度に変わった。大学運営は、国から配分される運営費交付金と、授業料や附属病院収入などの自己収入及び外部資金を合算して実施され、会計処理は「国立大学法人会計基準及び注解」に基づいて行うこととなった。複式簿記を導入し、財務諸表を作成し、内部監査体制を整備するとともに会計監査人による監査を受けて、財務内容は毎年広く公表することとなった。

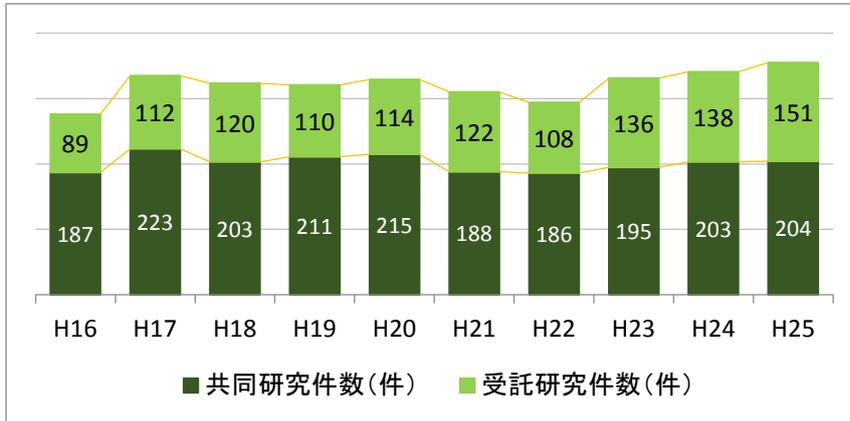


運営費交付金は大学改革促進係数として前年度比▲1.3%が課せられるため、毎年約1億円減額され、法人化後10年間で約18億円の減額となった。

ちなみに平成26年度の運営費交付金は、約119億円で本学収入の約30%にあたる。

## 研究推進・産学公連携

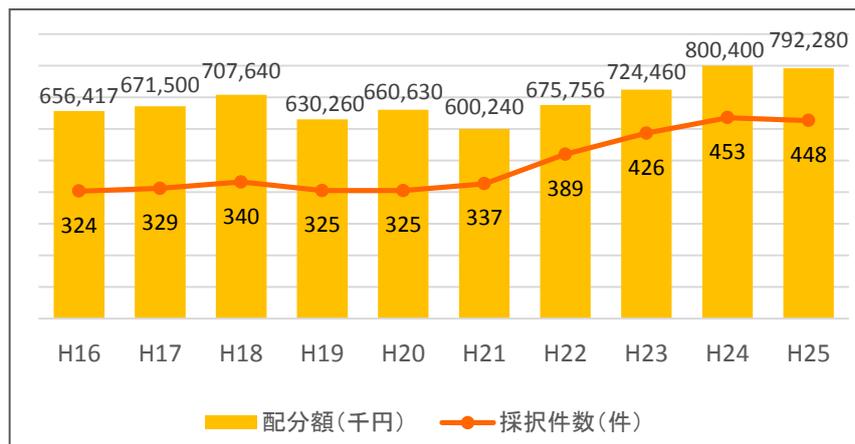
大学(学)は、企業(産)や公的機関(公)と連携して共同研究や技術開発を推進し、その成果をもって科学技術振興と地域社会の発展に貢献することが求められるようになった。本学では、法人化を機に地方大学としては他に先駆けて、宇部興産(株)、(株)トクヤマ徳山製造所、(株)山口銀行、宇部市等と包括的連携協力協定を締結した。現在、14機関と協定を結び、共同研究や技術交流、講演・講義、人材育成等を行っている。また、地域発イノベーションの創出を目指して、知的財産を軸とした研究開発の一貫したマネジメントを行う体制も整えている。



### 共同研究及び受託研究件数の推移

平成25年度の共同研究・受託研究の合計件数は355件で、法人化後の10年間で1.3倍となった。

なお、共同研究・受託研究・寄附金の合計額は、21億4千万円となっている。



### 科学研究費補助金の推移

科研費の採択件数は、法人化後の10年間で1.4倍となった。

ちなみに、平成25年度の採択件数は448件(うち160件が新規)、採択金額は約8億円だった。

## 地域連携

教育・研究と並ぶ第3の使命として本学は地域貢献を宣言した。広く地域社会に開かれた大学として一般市民を対象に生涯学習の場を提供する公開講座は、平成16年度は17講座を開講し(受講者329名)、現在では約2倍の講座数となっている。出前講義、高大連携事業のほか、平成18年度から正課授業の一部を開放する「開放授業」も始まった。

図書館や埋蔵文化財資料館は、従来からの一般開放のほかに地域と連携した企画展示を開始した。また、吉田キャンパスでは自然歩道や「共育の丘」などの環境整備を行い、地域住民の散歩コースや交流の場を提供している。平成24年からスタートした学生スタッフによるキャンパスガイド「てくてくツアー」も好評を得ている。



公開講座の様子

# 山大ブランドの創出 TOPIC



18歳人口の減少により、希望すれば誰もが大学に入学できる「大学全入時代」を迎え、いま各大学では、受験生や保護者、地域の方に魅力をアピールするため、ブランド力の向上に力を入れている。選ばれる大学になるため、教育面での特徴ある取り組みの他、大学の研究成果の製品化や独自ブランドの商品開発・販売、シンボルマーク、キャラクターの制作など、多方面でイメージ戦略が繰り広げられている。

## 山口大学発！さまざまな商品

平成16(2004)年の法人化後、本学でもシンボルマーク入りのグッズや、日本酒、まんじゅうなど、さまざまな商品を開発、販売している。



「長州学舎」

「山口大学まんじゅう」

日本酒「長州学舎」は、山口県で開発された酒米「西都の雫」を本学農学部附属農場で栽培し、萩市の酒造会社に醸造を依頼して誕生。平成21年から学内で販売されている。

平成18年度のおもしろプロジェクトで誕生。学生が大学のブランド商品を企画し、県内のまんじゅう製造会社や印刷会社と連携して制作した。現在も学内で販売されている。



「ヤマミィ」お披露目会

## ヤマミィの誕生

大学の教育理念やイメージを親しみやすいマスコットキャラクターに表現し、大学をより広くアピールする広報活動も行われている。

本学でも、創基200周年を契機に、学生、児童生徒(園児)および教職員が一体となって前進することを祈念し、また、地域に開かれた山口大学を目指し社会との連携を強めることを目的として、平成24年11月、山口大学のキャラクター「ヤマミィ」が誕生した。

ヤマミィという愛称は、Yamaguchi University から「Yama(ヤマ)」、ネコの鳴き声を意味する英語「Mew」から、「私」を表す「Me(ミィ)」を取り、組み合わせたもの。学内外を問わず、様々なイベントに参加し、山口大学の顔として活動している。

# 全学教育研究施設の整備

国立大学法人化に前後して、全学教育研究施設の組織体制が整理され、3つの機構が設置された。時間学研究所を除く各施設は、それぞれの機構の下で、新たな活動を展開することとなった。

## 大学教育機構

大学教育機構は、平成13(2001)年に「共通教育センター」と「アドミッションセンター」で組織され、翌年、学生の入学から卒業までを総合的にケアするため、共通教育センターを「大学教育センター」に改称するとともに、「学生支援センター」と「留学生センター」を加え4センターとなった。さらに、平成15年には、「保健管理センター」及び「エクステンションセンター」が加わり、6センターが協調的、一体的に活動することとなった。現在はエクステンションセンターを除く5センターで組織されている。



共通教育本館

\* エクステンションセンターは平成20年に社会連携室の下に位置づけられ、現在は「地域連携推進センター」と改称し、本学の地域連携を推進する中核的な組織として公開講座等を行い、地域社会の活性化に貢献している。

### 大学教育センター

平成8年4月、教養部の廃止を機に共通教育を実施する全学的組織として「共通教育センター」が設置された(平成14年に「大学教育センター」に改組)。平成16年度にTOEICを活用した英語教育への取り組みが文部科学省「特色ある大学教育支援GP」に、また平成20年度には全学的なカリキュラム改善推進の試みが同省の「質の高い大学教育推進GP」に選ばれた。

山口大学の理念・目標を達成するため、知的な「礎」としての教養教育を学部専門教育とともに体系的に捉えた学士課程教育を検討し、カリキュラム改革、全学FD研修、学生授業評価・教員自己授業評価の実施などの組織的教育改善活動を通じて、教育環境改善や、教員の意識改革などに取り組んでいる。

### アドミッションセンター

平成13年4月、入学者選抜方法に関する研究開発、入試広報に関する企画立案およびAO入試の実施・運営等を行う組織として設置された。アドミッションポリシーの理解深化を図るための広報活動や入試方法改善のための入学者の追跡調査、高校へのヒアリング等も行い、学内外への情報提供に努めている。平成22年には『山口大学AO入試10ヵ年総括報告書』を発行した。



AO入試説明会の様子

## 学生支援センター

平成15年4月、学生中心の大学づくりを目指して設置された。学生の進路・就学・心理相談などに対応する「学生相談部」、課外活動の支援・学生の生活支援・指導を行う「学生生活支援部」、および学生の就職支援・就職情報の提供を行う「就職支援部」の3部で構成され、学生に対する正課外教育・指導の充実やサービス機能の向上に努めている。

平成18年には「自主活動ルーム」を開設し、学生の自主的活動への資金支援制度である「おもしろプロジェクト」の運営やボランティア活動を支援している。また、学生相談所に臨床心理士を常駐させたり、就職支援にはキャリアカウンセラー等を配置するなど、学生に対するきめ細かいサービスを展開している。



学生支援課窓口

## 保健管理センター

昭和28年9月、大学本部内(山口市新道)に学生及び教職員の健康相談・健康管理のため「山口大学学生健康相談所」を設置したのが始まりで、昭和45年4月に文部省通知に基づく学長直属の組織として「保健管理センター」が正式に発足した。当時は、身体検査や通常健康相談に対応する医師、レントゲン技師、看護婦等のスタッフのほとんどを山口赤十字病院からの派遣に頼っていた。学生の身体検査は、結核予防の目的もあり、検査項目が多い上に体育館で実施しており、長時間を要し効率も悪かった。

昭和52年以降、施設や機器の整備も進み、センター独自で身体検査を行うことができるようになった。また、全国に先駆けてコンピュータによるデータ処理が導入された。

平成6年、医学部福利厚生棟(医心館)の開設を機に、小串キャンパス及び常盤キャンパスにおいても保健管理業務を行うようになった。健康診断や健康相談だけでなく、健康教育や産業衛生、保健管理に関する調査・研究など、学生・教職員の心身の健康保持・増進を推進している。



保健管理センター

## 留学生センター

平成14年、国際学术交流の促進を目的として「留学生センター」及び留学生課が設置され、同時に国際企画課も全国初の設置となった。その後、「国際センター」へと改組され、平成20年、再び「留学生センター」としてスタートした。

外国人留学生の受け入れや本学学生の海外留学を総合的に支援・推進し、外国人留学生の日本語・日本事情教育および生活指導を行うとともに、本学学生への外国語・異文化理解教育を通し、国際社会で活躍できる人材育成に努めている。



新留学生研修会

# 大学研究推進機構

大学における研究の活性化と、研究成果としての知的財産を社会へ還元するための組織として、平成14年に「産学公連携・創業支援機構」が誕生した。平成20年、「産学公連携・イノベーション推進機構」へ改称し、更に平成24年、総合科学実験センターと融合する形で組織再編を行い、「大学研究推進機構」となった。研究の入口から出口まで一貫した支援体制を構築するため、3センターと研究推進戦略部を整備し、大学全体の研究力強化を目指している。



大学研究推進機構建物外観

## 産学公連携センター

平成3年に設置された「地域共同研究開発センター」を前身とし、約20年間の実績を基に、平成24年に「産学公連携センター」として新たにスタートした。

地域・産業界に開かれた大学の窓口として、産学等の共同研究や受託研究の推進、技術・経営相談など各種のリエゾン活動、ニーズとシーズのマッチング活動、産業利用可能なシーズを基にした競争的研究開発資金の獲得支援などを行っている。そのため、学内シーズの発掘と外部への紹介、(有)山口ティー・エル・オーと連携した知的財産活用などの諸活動を展開している。

また、研究推進に必要な施設や先端機器の貸与など、ハード面からの研究開発支援を行うほか、大型の共同研究プロジェクト立ち上げ・推進、大学発ベンチャー起業支援なども行っている。

## 知的財産センター

平成15年、文部科学省の大学知財整備事業の採択を受け、「知的財産本部」が設置された。事業終了後も活動を機能強化し、平成24年に知財教育部門を加えて「知的財産センター」として再スタートした。知的財産の活用を通じて、大学の社会貢献を推進することを掲げた山口大学知的財産ポリシーの下に、積極的に活動している。

発明等の権利化においては、CD(コーディネーター)やURA(ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター)との連携により、強い特許の創出を図り、知的財産の活用では、(有)山口ティー・エル・オーと協力しながら、産業界への移転を図り、社会貢献を推進している。

また、知財を創出する側の人材育成を図るため、共通教育授業では全学必修の知財教育体制を敷いており、本学の特徴と言える。

そのために、本学が独自開発した YUPASS(山口大学特許検索システム)や産学公連携活動の成果等を教育現場に導入する等、特徴ある実践的知財教育に取り組んでいる。



知的財産センター



リサーチラボノート

コクヨ S&T(株)と共同開発した研究記録用ノート

## 総合科学実験センター

平成15年、学内既存の附属研究支援施設(8施設)を統合して発足し、平成24年に大学研究推進機構に統合された。高性能機器を備え、学内外の教育・研究活動を活性化できる環境を整え、学内の研究活動はもとより、共同研究や研究者間の学術交流を積極的に推進している。また、排水処理施設においては本学の教育・研究・医療活動に伴い発生する排水に基づく汚染を防止して、教職員・学生および周辺地域住民の生活環境の保全を図っている。



機器分析実験施設



透過型電子顕微鏡  
(生体分析実験施設)

### <吉田地区>

- ・機器分析実験施設(平成4年設置)
- ・実験動物施設(昭和55年設置)
- ・システム生物学・RI分析施設(昭和46年設置)
- ・排水処理施設(昭和58年設置)

### <小串地区>

- ・生体分析実験施設(平成15年設置)
- ・生命科学実験施設(昭和56年設置)
- ・RI実験施設(平成15年設置)
- ・遺伝子実験施設(平成6年設置)

## 研究推進戦略部

平成24年、本学における研究推進活動を戦略的に展開することにより、大学全体の研究力強化に資することを目的として設置された。また、研究支援専門職である URA を3キャンパスに配置し、研究者の研究活動の企画・マネジメント支援、研究成果の活用促進、研究活動の活性化及び研究開発マネジメントの強化等の支援に関する業務を行っている。

## 大学情報機構

平成15年、学術情報及び情報基盤を総合的に整備する目的で「学術情報機構」が設置された。附属図書館(平成16年から「図書館」に改称)、メディア基盤センター及び埋蔵文化財資料館の3組織で構成され、学術情報基盤の基本計画策定や施策実施上の調整、情報セキュリティの施策・実施を業務としている。

平成18年、「大学情報機構」と改組されたが、引き続き本学の教育・研究・社会連携活動を情報基盤の面から総合的に支援するとともに、社会へ向けた大学情報の発信を積極的に実施している。



(左上)総合図書館

(右上)メディア基盤センター

(右)埋蔵文化財資料館

## 図書館

昭和24年、山口大学開学に伴って附属図書館が設置された。当初文理学部内に本館を置き、旧制高校・高専校の図書館をそのまま引き継いで各学部に分館を置いたが、昭和45年の統合移転を機に山口地区は本館に統合した。昭和39年、山口県立医科大学の国立移管に伴って医学部分館が設置された。

昭和56年から業務システムの電算化が始まり、パソコン上で蔵書を検索できるようになった。資料の充実に努める一方、IT技術の発達とともに情報ラウンジの設置、自動貸出返却装置導入、電子ジャーナル及びデータベース等の導入ほか、貴重資料の修復・デジタル化や学術機関リポジトリ(通称YUNOCA、本学研究者の論文など学術研究成果を収集・蓄積・保存し、インターネットで世界に発信するサービス)も実施している。また、昭和62年から一般市民にも広く開放している。



ラーニングコモンズでビブリオバトル開催

平成16年、法人化に伴い総称を「山口大学図書館」とし、本館を「総合図書館」、各分館も「医学部図書館」「工学部図書館」に改称した。平成25年、総合図書館の増築・改修工事が竣工し、収蔵スペースの強化はもとより、飲食可能なスペースやアクティブラーニングに対応するスペースなど多機能な学習空間を備えた図書館に生まれ変わった。

## メディア基盤センター

昭和40年、電子計算機 FACOM231 の導入と同時に工学部内に電子計算機室を設置したのが始まりである。昭和56年「情報処理センター」として発足し、山口分室と小串分室を設置した。平成7年に「総合情報処理センター」に改称、平成14年「メディア基盤センター」となった。ICTを活用した教育・研究環境や学内情報ネットワーク整備、迷惑メール対策を含む電子メール環境整備、電子認証の基盤整備、eラーニング教材などデジタルコンテンツの活用支援、大規模・高速計算のための環境整備および関連する研究開発を行っており、全学的な視点で情報の流通・蓄積・発信に関する基盤環境の整備を担っている。

また、情報を扱う部署として情報セキュリティ管理システム (ISMS)の構築・運用を進め、適切な情報管理と情報セキュリティ文化の普及に努めている。平成20年10月、情報セキュリティマネジメントに関する国際規格 ISO/IEC27001 の認証を取得した。



ISMS 認証登録証授与式

## 埋蔵文化財資料館

昭和52年、山口大学吉田遺跡調査団(団長:力武一郎学長)の発掘調査成果の収蔵庫として設置された。昭和54年に調査員が配置され、学内の埋蔵文化財の発掘調査及び出土品の収蔵・展示・調査研究を行っている。

本学が所在する県内5地区(吉田、白石、小串、常盤及び光地区)はいずれも文化財保護法が定める遺跡に立地しており、埋蔵文化財資料館は、学内での地下掘削を伴う開発工事計画等の立案に際して遺跡の保護を目的とした発掘調査を業務としている。

また、山口大学構内遺跡や様々な埋蔵文化財資料を保管するだけでなく、発掘調査報告書の刊行、企画展示・公開授業の開催、およびインターネットでの情報発信など、さまざまな公開活動を実施することにより、教育・研究の場と地域社会とを繋ぐ拠点施設となるよう努めている。



埋蔵文化財資料館創立30周年特別展示  
『稲作到来』の様子

## 時間学研究所

時間学研究所は、平成12年、当時の廣中平祐学長と時間生物学分野を中心とした学内研究グループにより設立された国内唯一の時間学に関するユニークな研究所である。時間という切り口から、物理学、生命科学、歴史学、哲学、精神科学などの研究者間の交流を図り、新たな学際領域を創造するとともに、その成果の社会的な還元を行なうことを目的として活動している。

研究グループは4つに分かれ、「社会的時間と人間的調和の研究」「生物に刻まれる時間と環境変遷に関する研究」「多文化圏における時間表象の研究」「その他、時間に関する他分野にまたがる研究」をテーマに研究が進められている。

(右)時間学アフタヌーンセミナーin 東京

研究所では時間学セミナーを定期的で開催するほか、国際シンポジウムやイブニングセミナー・アフタヌーンセミナーを開催したり、サイエンスアゴラへの出展を通じて、研究成果を社会へ還元している。



日本で初めて機械時計が伝来したのは山口の地！

宣教師フランシスコ・ザビエルが、1551年、布教のために訪れた際、周防国領主の大内義隆公に時計を献上したのが日本に伝わった最初と言われています。この時計は置時計だったらしいのですが、残念なことに大内氏滅亡とともに消失してしまい今は見ることはできません。

山口で時間の研究を始めたのは、このご縁によるのかも・・・？



# 成長をつづける山口大学

## 大学院技術経営研究科(MOT)

平成17(2005)年4月、西日本唯一の MOT 専門職大学院として山口大学大学院技術経営研究科が新設された。技術経営(Management of Technology:MOT)とは、「技術を事業の核とする企業・組織が次世代の事業を継続的に創出し、持続的発展を行うための創造的、かつ戦略的なイノベーションのマネジメント」を意味している。

地域の社会人(企業内で相応の実務経験を積み、イノベーション志向の部門でマネジメントを行う人やその予備軍、さらに新事業創出を担うベンチャー起業家予備軍など)を主たる対象者として、地域経済の自立的発展と連鎖的イノベーションの創出に貢献できる人材を育成することを目的としている。定員は15名で院生の多くは西日本を中心とした企業の経営者や行政関係者などである。

宇部・広島・福岡の3教室体制で展開

〈社会人対象〉

広島教室 土曜日を中心とした授業で  
福岡教室 技術経営修士の学位が  
取得できます

宇部教室 宇部教室は秋入学  
平日、全科目英語による授業

大学院技術経営研究科ホームページより

## 共同獣医学部

平成24年4月、山口大学と鹿児島大学に共同獣医学部が誕生した。共同獣医学部は双方の大学が持つ教育研究資源を有効に相互活用し、得意とする分野の獣医学教育を両大学の学生に等しく提供する共同教育課程であり、大学設置基準等の一部を改正する省令(平成20年文部科学省令第35号)に基づく制度を活用した全国初の共同学部である。

獣医学すなわち動物医学は、生物学に基礎を置く応用科学であり、人類と動物の福祉に貢献することを理念とし、これを達成するための学理の探究と技術の開発を目的としている。この理念に基づいて、共同獣医学部は、「深い知識と高度な技術を備えた専門性の高い獣医師」、および「幅広い教養と高い倫理観を有する、人間地球社会を俯瞰できる人材」を養成する教育を目指している。さらに、獣医関連分野のグローバル化を念頭に、欧米獣医学教育の評価に耐える獣医学教育体制の構築を開始している。



附属動物医療センターでの診療

## 躍進する附属病院

医学部附属病院は、山口県立医科大学時代の昭和19(1944)年に設立され、山口県の中核病院として発展してきた。現在では、全ベッド数736床、26診療科と23の診療部を擁し、あらゆる分野の疾患を総合的に診療できる県内で唯一の特定機能病院となっている。

平成12(2000)年、国立大学病院としては最初に設置された高度救命救急センターでは、毎年約1,000例の高次救急患者の診療にあたり、宇部市と提携しているドクターカーや山口県ドクターヘリの基地病院として救急医療体制を強化し、全県下・他県からの重症患者の治療に対応している。

また、平成19年に「山口県がん診療連携拠点病院」、平成21年に「山口県肝疾患診療連携拠点病院」、平成23年に「総合周産期母子医療センター」に指定された。患者中心の透明性の高い医療を提供し、変化する社会の要望に応えうる全人的医療のできる有能な医療人の育成と、医学・工学・生命科学の英知を集約した新しい診断および治療法の研究開発に邁進している。

### 救急医療専用ヘリコプター ドクターヘリ

平成23年1月、運行がスタートした。基地病院である附属病院に常駐し、消防本部からの要請を受けて山口県全域に出動する。救急医療用機器等を装備しており、救急医療専門の医師と看護師を救急現場にいち早く運び、直ちに治療を開始し、高度な医療機関に患者を搬送することが可能となった。



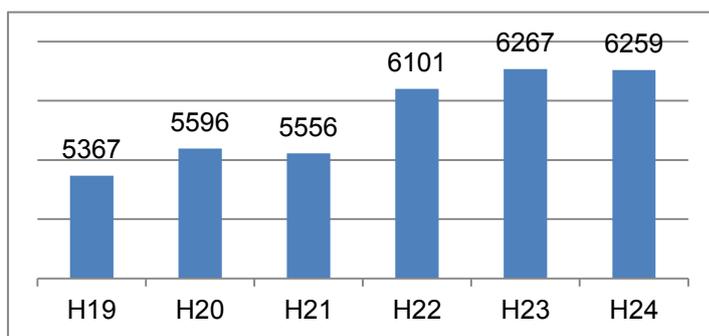
ドクターヘリ

### 手術支援ロボット ダヴィンチ

平成24年8月、内視鏡下手術用の支援ロボット「ダヴィンチ」が導入された。この最先端の医療機器は、(1)従来の開腹手術などに比べ傷口を最小限とすることができるため、患者への負担は少なく社会復帰が早い、(2)立体画像で手術を行うことができるため、より精密な手術が可能、(3)カメラで術野を拡大して見ることができるため、繊細で確実な手術が可能となるなど、多くのメリットがあげられる。



ダヴィンチ操作時の様子



### 手術件数の推移

ドクターカーやドクターヘリの導入による緊急手術、ダヴィンチ(ロボット支援手術)やハイブリッド手術室の設置による高度な手術件数が増加している。

### 国際交流の本格化

1950年代から日本経済は急速な経済成長を遂げ、80年代のバブル経済によって絶頂期を迎える。経済の発展は世界交流を生み、日中国交の回復など、「国際化」が急速に進んでいった。

本学では、昭和58(1983)年6月に「山口大学と山東大学との学術交流協定」を締結し、学術を中心とした国際交流が本格的にスタートした。平成に入ると、世界各地の大学との大学間・部局間協定が相次ぎ、学術交流協定に基づく交換留学など学生の交流も活発化した。



山東大学との協定調印式



学術交流協定を締結している機関(平成26年5月1日時点) ※()内の大は大学間、部は部局間協定  
現在、世界各地の96機関と交流協定を締結している。

法人化以降、大学の国際化を一層推進するため平成20年に「国際戦略本部」を設置した。また、海外の交流協定校との連携協力によってサテライトオフィスを開設し、留学生募集や共同研究拠点、共同授業提供などの事業を展開している。

(右)海外の国際連携オフィス

北京国際連携オフィス
山東国際連携オフィス
パリ国際連携オフィス
ジョグジャカルタ国際連携オフィス
台湾国際連携オフィス
クアラルンプール国際連携オフィス



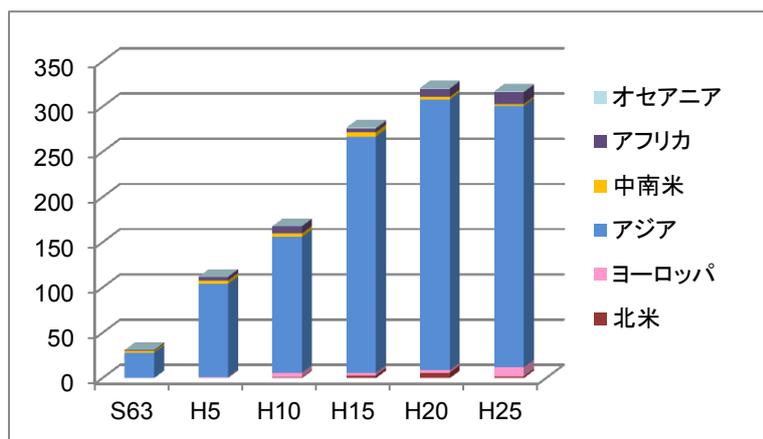
ガジャマダ大学内の国際連携オフィスで開催された「STUDY IN JAPAN」セミナー

## 外国人留学生

昭和56年に山東大学との間で学生の交換留学が始まった。昭和58年、政府の「留学生10万人計画」を受けて、留学生受入は加速し、本学の留学生数も増加の一途を辿った。現在では、約30カ国から300名を超える留学生が学んでいるが、新たに政府が策定した「留学生30万人計画」に沿って、更なる留学生受入を図る予定である。



書道に挑戦



外国人留学生数の推移

全体の約9割がアジアからの留学生となっている。そのうち、過去最も受け入れ数が多いのは中国出身者。平成22年にインドネシアの2大学に国際連携オフィスを設置したことにより、インドネシアからの留学生も増加した。



サマープログラムに参加した  
海外の学生たち

夏休みに留学生センターが主催する短期留学プログラム。本学では、日本語や日本文化の理解を深めてもらうことを目的としている。最終日には浴衣を着て、『山口七夕ちょうちん祭』を楽しむのが恒例となっている。

## 国際交流会館

外国人留学生や研究者の受け入れ増加に伴い、受け入れ態勢の整備・充実も図られた。昭和63年、吉田キャンパスに山口国際交流会館が、平成9年に常盤キャンパスに宇部国際交流会館が開設された。また、平成20年には吉田キャンパスに国際交流会館2号館が完成し、本学の留学生用宿舎は、吉田キャンパス71部屋と常盤キャンパス47部屋を合わせ、118部屋となっている。



国際交流会館1号館  
(吉田キャンパス)

## グローバルな人材の育成

平成27年度に、「国際総合科学部」の開設を予定している。これは、グローバル化に対応できる高い英語力を持ち、かつ科学技術が関与した諸問題に対して複眼的、総合的に理解し、解決できる人材の育成を目指すものである。

# 活気あふれる山大ライフ

## 課外活動

学生の自主的な課外活動を行う団体として「体育会」「文化会」「大学祭実行委員会」があり、大学の公認団体となっている。体育会、文化会には多数のサークルが所属し、学生たちが日々活発に活動をしている。

### 体育会

体育会は、昭和28(1953)年、運動部の全学的組織として結成された。発足当時は山岳など9サークルで構成されていたが、現在では38サークルが所属し、毎年開催される中国五大学学生競技大会、中国地区学生リーグ戦、県内外の各種大会に参加するなど活躍している。また、体育会企画として体育活動の活性化のための各種スポーツマッチも開催しており、特に毎年11月に行われる学長杯駅伝大会は参加者も多く、伝統ある行事となっている。



体育会ロゴマークと機関誌「和意恵素」

#### 1979年

合気道部・アーチェリー部・  
空手道部・弓道部・剣道部・  
硬式庭球部・硬式野球部・  
サイクリング部・サッカー部・  
山岳部・柔道部・準硬式野球部・  
少林寺拳法部・水泳部・  
器械体操部・卓球部・  
軟式庭球部・馬術部・  
バスケットボール部・バトミントン部・  
バレーボール部・ハンドボール部・  
ボート部・ヨット部・ラグビー部・  
陸上競技部・ワンダーフォーゲル部・  
スキー部

※          は現在体育会に所属していない部

#### 現在(2014年)

アイスホッケー部・アメリカンフットボール部・  
応援団・ゴルフ部・自動車部・女子バスケットボール部・  
女子バレーボール部・ラクロス部(男子/女子)・  
ソフトテニス部・軟式野球部・フットサル部・  
体育会総務部



体育会幹部 CMC(サークルミーティングキャンプ)  
(平成25年)



### 体育会、冬の伝統行事 —学長杯駅伝大会—

体育会の発足時から今なお続く体育会主催の冬の名物行事。かつては職員も学生と一緒に参加していたという。終わった後には体育会の世話役から豚汁がふるまわれる。



(上)昔から変わらぬ学長杯駅伝の様子  
(右)こちらも伝統となっている豚汁

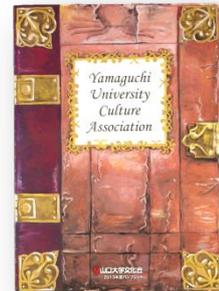


## 文化会

文化会は、昭和33(1958)年4月に文化部連合から名称変更をし、発足した。発足当時は文芸部など12サークルで構成されていた。時代の移り変わりとともに、所属サークルも変化し、現在は17サークルが所属している。

毎年開催される中・四国国立大学連合演奏会・美術展覧会への参加、音楽系サークルの定期演奏会や演劇等の定期公演では、学生はもとより一般市民からも親しまれている。

(右)文化会ロゴマークとパンフレット



### 現在(2014年)

#### 1979年

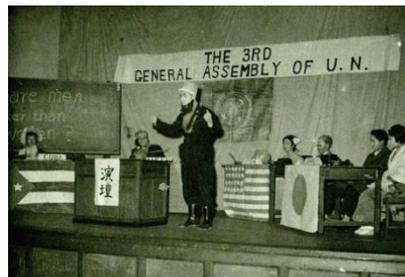
管弦楽団・マンドリンクラブ・邦楽部・混声合唱団・  
吟詠部・美術部・書道部・写真部・茶道部・考古学部・  
洞穴研究会・ESS・YMCA・演劇研究会・映画研究会・  
AMC 音楽鑑賞会・ユネスコクラブ・沖縄問題研究会・  
教育問題研究会・部落解放研究会・児童文学研究会・  
児童文化研究会・社会科学研究会・  
ユースホステルクラブ・エスペラントグループ

※          は現在文化会に所属していない部

映画倶楽部・演劇部・将棋部・  
吹奏楽部・文芸部・文化会執行部



文化会執行部(昭和36年)

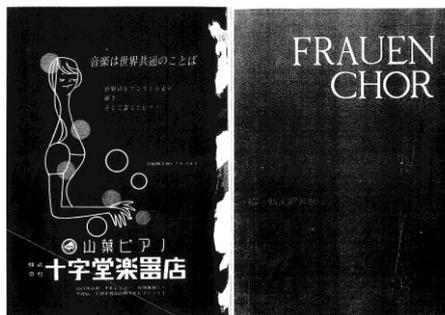




## ああ山大 山大 山大♪ —学生歌誕生—

「ああ山大♪」という馴染みの山口大学学生歌は、昭和29年、メンネル・コール(男声合唱団)の部員であった藤井哲雄氏(教育学部卒業)によって作曲された。学生歌はメンネル・コールの演奏ではじめて世に発表され、その後、定期演奏会や巡回演奏会、交歓演奏会の開幕の際に必ず歌われた。現在では、入学式などの行事で歌われている。

メンネル・コールは昭和21年、教育学部の前身である山口師範学校時代に発足し、昭和48年からは山口大学混声合唱団となった。ちなみに女子はフラウエン・コールとして、メンネル・コールとは別に活動していたが、現在は混声合唱団で男女一緒に活動している。



(左)メンネル・コール、フラウエン・コールの部員  
(上)当時のパンフレット



# 学生の諸行事

## 大学祭—姫山祭・医学祭・常盤祭—

大学祭は、昭和24(1949)年の開学から毎年欠かさず行われている。当初は大学祭という名称の行事はなかったが、11月5日の開学式前後に行われた開学記念行事を、昭和26年からは大学祭とし、この年のものを第3回とした。吉田キャンパスの大学祭は通称「姫山祭」と呼ばれ、11月上旬に行われている。同様に宇部地区では、小串キャンパス(医学部)で医学祭を、常盤キャンパス(工学部)で常盤祭を開催している。近年では、大学祭に地域の方も多く参加され、学生自身が楽しむだけではなく、地域の方との交流の機会にもなっている。



(左)大学祭ステージ(昭和40年)  
(上)市内パレード(昭和40年)

現在の姫山祭の様子  
(平成25年)





(上) 常盤祭(昭和59年)  
 (左下) 常盤祭ステージ(昭和58年) (右下) 医学祭(昭和45年)

(上) 常盤祭(平成25年)  
 (下) 医学祭(平成25年)

## 七夕祭

7月初めの土曜日に実施される七夕祭は、統合移転前の各学部の寮で行われていた寮祭が前身であり、吉田地区の統合移転に合わせて吉田寮、榎野寮が引き継ぎ、現在も行われている。吉田キャンパスに移転当初は吉田寮、榎野寮で個別に行っていたが、昭和46(1971)年から「七夕祭」に統一された。毎年4月、新入生は実行委員会のメンバーとして先輩と一緒に準備にとりかかり、3ヵ月の苦楽を共にする中で、大学生活に馴染んでいく大切な祭でもある。

当日はステージ企画やサークルによる展示、神輿行列、模擬店の出店などが行われる。市民の方の参加も増え、回を重ねるごとに盛大になった。平成26年で42回を数える。



七夕祭(平成25年)  
 威勢の良い掛け声とともに御輿が担がれ、参加する人の目を楽しませている。



(上)七夕祭実行委員(平成25年)

七夕祭は多くの実行委員によって企画・運営されている。七夕祭までの準備期間、学内では法被を着た実行委員がよく見かけられる。

### 寮祭の頃・・・

七夕祭の前身である寮祭は、山口市内にあった各学部の寮で、創立記念日や大学祭に合わせて行われ、寮生以外の学生はもちろん、市民も多数参加してにぎわった。寮祭は前身校から続く伝統の行事であった。寮生がそれぞれの部屋を政治風刺や社会風刺等の飾りつけを施して、アイデアを競い、参加者がそれを見て回った。また仮装行列や樽御輿も有名であった。工夫を凝らした仮装行列や赤ふんどの勇壮な樽御輿は多くの市民の声援を受けた。この仮装行列は現在の七夕祭に受け継がれている。



鳳陽寮祭の様子(昭和30年)

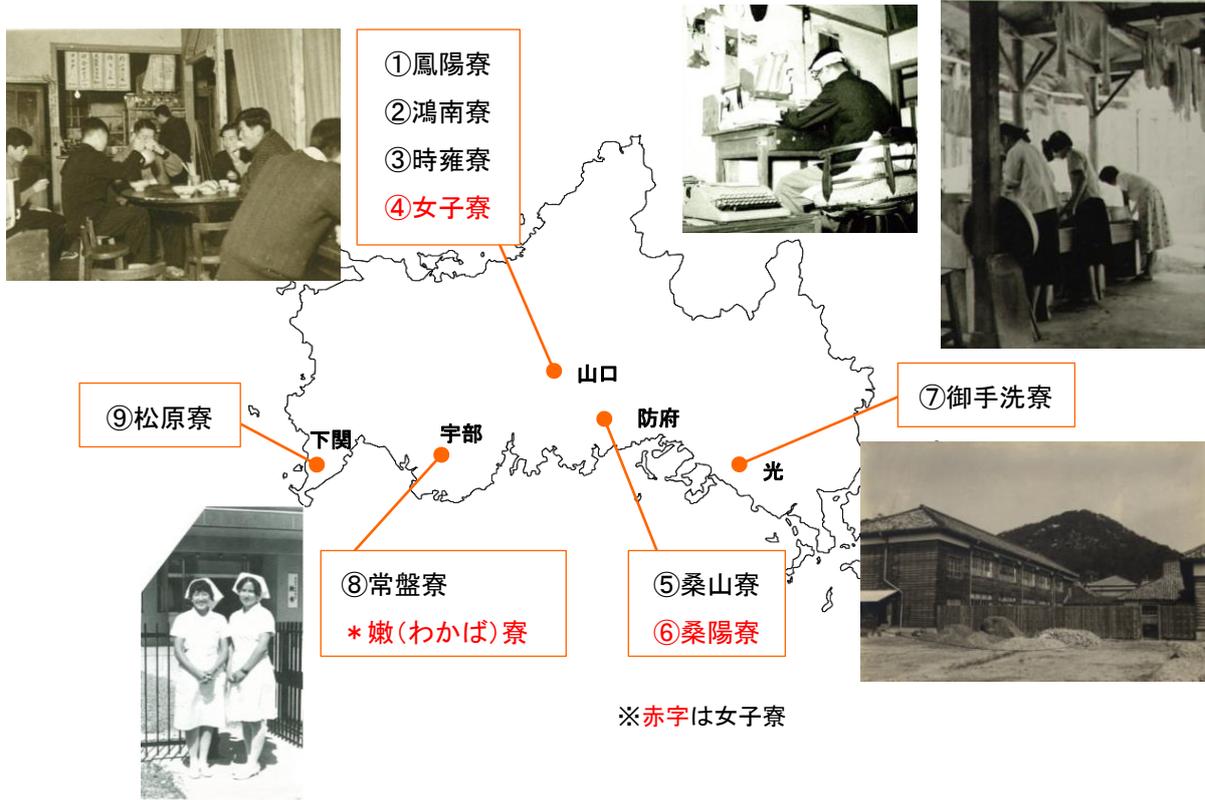


時雍寮祭の様子(昭和38年)

# 学生寮

## 統合移転以前の学生寮

学生寮は学舎とともに学生の生活を支える大切な場所であり、思い出の場所でもあった。開学当時は各地区合わせて9寮(山口地区4、宇部地区1、下関地区1、防府地区2、光地区1)あり、その後、教育学部の光分校と防府分校が山口に統合され、統合移転時には6寮だった。寮には食堂や床屋などがあり、運営は学生部関係者の指導助言のもと、寮生の自治に委ねられていた。



※赤字は女子寮

地区	寮名	対象学生	定員	備考
山口	① 鳳陽寮	経済学部、文理学部文学科の学生	172名	昭和49年に廃止
	② 鴻南寮	文理学部文理学科の学生、 工学部・農学部1年生	120名	昭和42年に廃止
	③ 時雍寮	教育学部の学生	168名	昭和42年に廃止
	④ 女子寮	山口地区の全学部の女子学生	42名	昭和43年に廃止
防府	⑤ 桑山寮	教育学部防府分校の男子学生	60名	昭和35年に廃止
	⑥ 桑陽寮	教育学部防府分校の女子学生	25名	昭和35年に廃止
光	⑦ 御手洗寮	教育学部光分校の学生	男50名、女100名	昭和32年に廃止
宇部	⑧ 常盤寮	工学部2年生以上の学生、 工業短期大学の学生	150名	
	* 嫩寮	看護学校の学生	150名	昭和57年に廃止
下関	⑨ 松原寮	農学部2年生以上の学生	30名	昭和41年に廃止

「山口大学学生便覧(昭和31年)」による

## 現在の学生寮

吉田地区への統合移転に伴い、山口地区の寮は段階的に統合・廃止された。現在、吉田地区には、吉田寮、榎野寮の2つが、宇部地区には、常盤寮、常盤女子寮がある。

### 吉田寮(男子寮)

定員：1号棟と2号棟あわせて306人

対象学生：吉田地区の学部生及び大学院生

吉田寮(1号棟)は昭和42(1967)年に設置された。開設時に吉田地区への統合移転を完了していたのは、農学部と教養部だけだったが、96%という高い入寮率だった。当初は2人部屋(150室)だったが、平成23年に单身用ワンルームマンション型の2号棟(130室)が完成。学生の交流の場として各階に談話室が設けられているほか、生活空間としての快適性を考え、各部屋にはトイレ、バス、空調設備、机、ベッドが設置された。翌年には、老朽化及び耐震対策に伴い1号棟が改修され、2号棟同様、ワンルームマンション型(176室)となった。



改修後の吉田寮1号棟



平成22年頃



現在



### 比べてみよう！-吉田寮の部屋の様子-

かつては2人部屋だったが、現在は1人部屋に。また、改修を機に食堂は無くなったが、友達同士でたこ焼きパーティなどを楽しんでいる。



### 榎野寮(女子寮)

定員：2号棟 69人

対象学生：吉田地区の学部生及び大学院生

榎野寮(1号棟)は昭和42年に62名分だけが建設され、教養部の女子1年生が入寮した。翌年には残り94名分の居室が完成し、156名収容可能となった。平成26年にバス・トイレ付のワンルーム型の2号棟が新築され、今後は1号棟の改修工事が予定されている。



榎野寮2号棟竣工記念式

常盤寮(男子寮)

定員:A棟96人 B棟48人

対象学生:医・工学部生及び常盤地区の大学院生

常盤寮は宇部の工学部のキャンパス内にある。宇部工業専門学校時代の昭和16年に建設された木造の寮は、台風等の被害もあって老朽化したため、昭和51年、新寮(常盤寮A棟・B棟)が建設された。当時としてはめずらしく個室タイプであった。A棟は今後改修工事が予定されている。



常盤寮 B棟

常盤女子寮(女子寮)

定員:64人

対象学生:医・工学部生及び常盤地区の大学院生

常盤女子寮は、工学部で学ぶ女子学生の増加に対応し、平成21年に設置された。女子学生に安心して学んでもらう環境の整備ということもあり、施錠はセキュリティーに配慮してオートロックを採用、監視カメラも設置された。



常盤女子寮

山口大学新聞 1991年9月21日(土)

# 下宿めぐり

No.3

## 奇聞店観

### 潜入! 吉田寮の巻

「山口一の雄住」吉田地区の不夜城。なごきまきまなだ勢を持つ吉田寮。はたしてその実体は? 学内北方に位置し、鉄筋コンクリート五階建て。一号室から一五〇号室まで基本的に二入部屋で、入学時の新入生の人数次第で一人部し屋の申請もできる。机、ベッド、本棚などは揃えていて、布団まで持ってくるのは別生活可能である。諸経費は六十五円、食券を全部買ったとしても一万円といったところ。

寮員は朝食用、昼夕食、百円田といふ学校の安心ももろろん寮生も可。

(但し別料金)。特に昼食はカツカレーなどメニューによっては行列ができることもある。ただ当たり前はずれがあること、食事時間が早いことが悩みの種だ。寮入口の二の黒板にはどこから寄せ集められているのかアルバイト情報がぎっしり。おいしい単発バイトも多く、厚生課と並ぶバイト幹事の中枢である。

また学内一の黒白にある吉田寮上からの眺めはまさに絶景。この屋上からの素晴らしい眺めを寮外生(特に女性の方)に貰いたく、毎年夏には屋上ビアガーデンが催されている。(今年はまだ残念ながら雨)

整理整頓された室内にはビックリ!

天のため中止だった。九月、一月の学期末にはさまざまなテスト情報飛び交うのも寮生の特権だ。ただし、寮生曰く「情報収集能力はあっても管理能力がない」。

面明不足が聞かれる山本敷内では、一年中夜でも明かりが消えることのない吉田寮周辺は、治安がよい苦なのになぜかこの不夜城に近づく女子学生はまず、ない。寮生言えはシングルにどてら、学内でも平気であらうと言いつつイメージがあるが、「セクハラ」ではないとある寮生(匿名・怪しい)。

随々と東西で寮生の班が分かれていて電話、風呂などは当番制になっている。生班長同体ということでも寮内での団結は堅く、また、実行委員会を組織して行う七夕祭を盛大に行っている。寮の運営は立派、または推進によって運ばれた総務部員によって行われた総務企画でもあまの例をみない全国でもあまの例をみない学生自治寮という体制と

リトルテラス  
ほろふき男爵

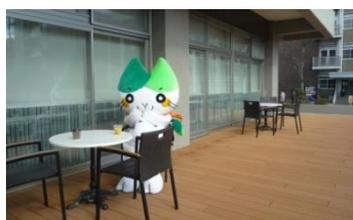
出前してくれるので、出前金は一品で数品でも一律一〇〇円。これからは

松のおすすめ♡  
しーそー巻き巻きレタス肉

CAN料理

吉田寮の様子を伝える「山口大学新聞」(平成3年9月21日)

# キャンパス風景



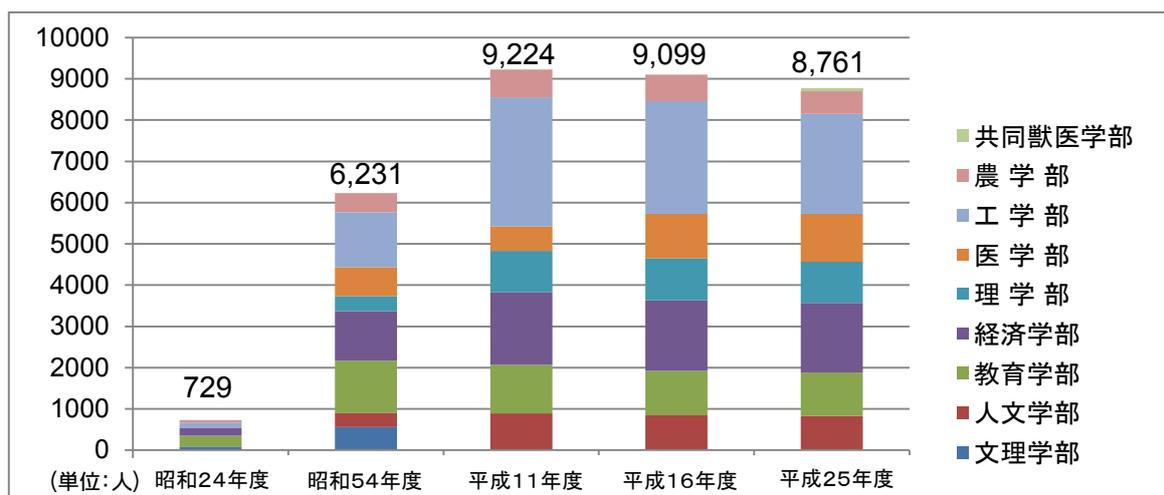
# 数字で見る学生生活

昭和24(1949)年の山口大学発足から現在までの学生生活の移り変わりは、数字からも見えてくる。山大発足の昭和24(1949)年、30周年の昭和54(1979)年、50周年の平成11(1999)年、法人化した平成16(2004)年、平成25(2013)年現在を基準に比較してみたい。各数値は、主に大学要覧と学生生活実態調査報告書から抜粋した。

学生生活実態調査は、昭和29年度に第1回が実施され、3～5年に1回、現在まで継続して調査が行われている。第1回の調査は、学生の生活実態を健康面を中心に把握し、実状に即した適切な健康管理の方策を立て、そのために必要な衛生施設の整備を行うことを目的として実施された。現在は、様々な角度から学生の現状を把握し勉学の環境改善を考えるため、調査分析が行われている。

## 学部学生数

学部学生数は、学部の増設に伴い年々増加したが、少子化の影響もあり、平成19年度をピークに減少傾向で推移している。



※昭和24年度は大学一覧、以降は大学要覧より



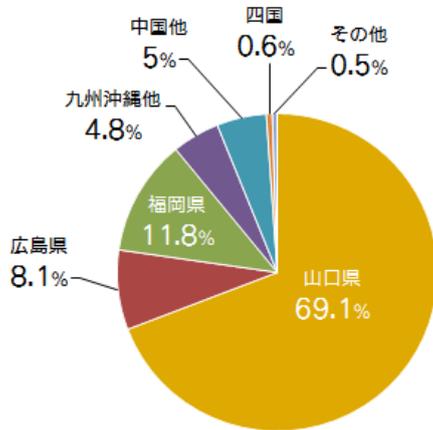
第1回入学式(昭和24年)



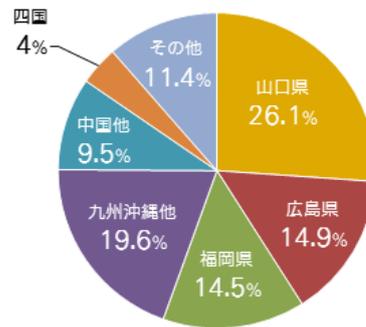
第65回入学式(平成26年)

## 学生の出身地

昭和29年、第1回学生生活の実態調査が行われた。調査当時、学生の県内外出身者の割合は、県内出身者が約70%を占めていた。学部別に見ると、教育学部は約90%が県内出身者で占め、反対に県外出身者の多いのは経済学部、工学部、農学部だった。現在は県外出身者が増加しており、それに伴い下宿・寮生の割合も増加していることがわかる。



昭和29(1954)年

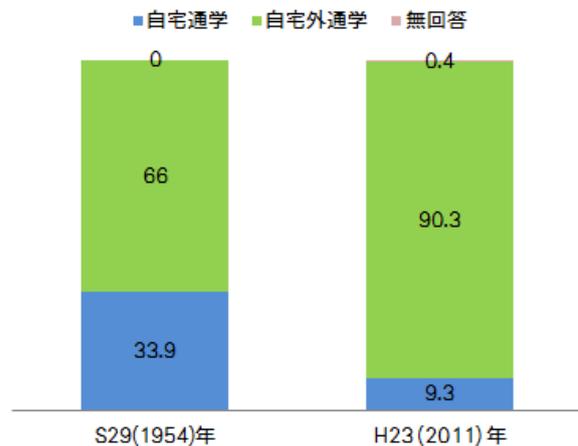


平成23(2011)年

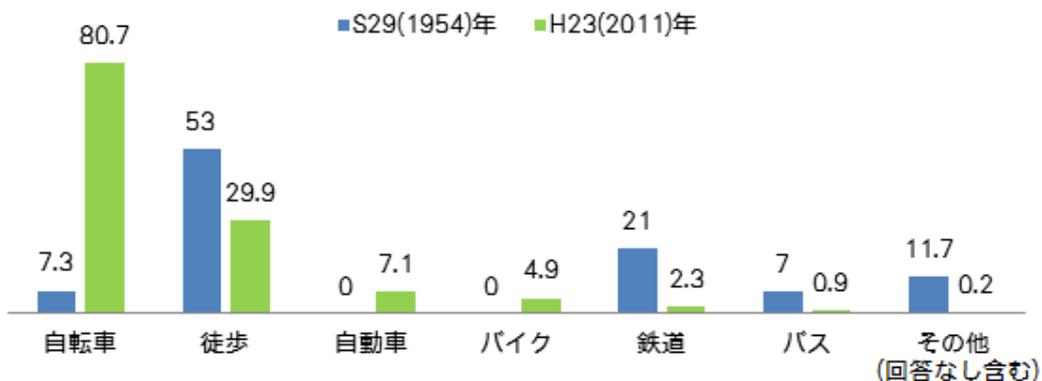
## 自宅通学生と下宿・寮生の割合

平成23(2011)年の学生生活実態調査と、平成23年度住宅・土地統計調査(総務省)から算出した結果、山口市の賃貸住宅の約1/5は山大学生が借りている計算になる。

さらに、約80%が自転車で通学しており、通学時間に関する設問では、通学に要する時間が20分以内と回答したものが92.4%で、大半の学生が大学にかなり近いところに居を構えていることがわかる。



## 通学に利用する交通機関



## 山大生の学費・生活費

	昭和29(1954)年	平成23(2011)年
授業料	3,600 円(教育学部は免除)	535,800 円
受験料	400 円	17,000 円
入学金	400 円	282,000 円
アルバイト収入	150~250 円 / 日	50,000 円以上 / 月※
生活費(自宅通学生)	2,000 円 / 月	
生活費(寄宿舎生)	3,000 円 / 月	30,000~60,000 円未満 / 月※
生活費(下宿生)	3,500 円 / 月	

※『学生生活実態調査』の回答の最頻値

### 【参考】昭和24(1949)年の物価

銀行の初任給	3,000 円	ラーメン	23 円	週刊誌	15 円
教員の初任給	3,941 円	食パン	40 円	岩波文庫	30 円
自転車	7,345 円	ビール	126 円 50 銭	辞典	700 円

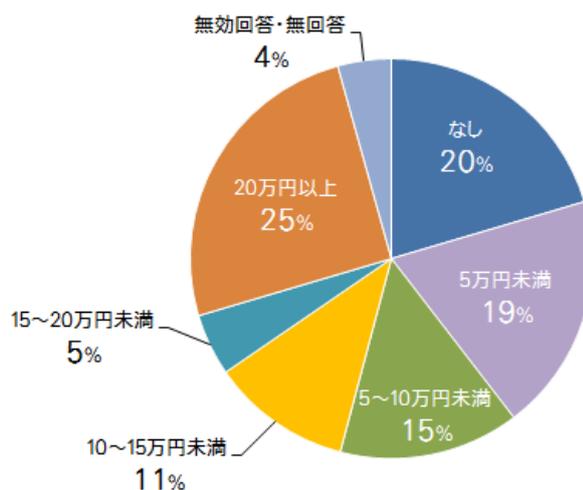
『値段の明治・大正・昭和風俗史 / 週刊朝日編』より抜粋

## 現在の学生の貯金額

貯金がある学生は全体の75.3%であった。貯金が無いと回答した割合は、男子のほうが女子よりもやや高かった。学年別で集計すると、20万円以上貯金している割合は、3年生が最も高かった。調査報告書では、就職活動に向けた貯蓄の影響と考察している。

生活白書	
A氏の不思議な学生生活 〈下宿(6畳)・台所付き・風呂なし / 広島県S市出身〉	
収入	¥70,000
支送り	¥30,000
奨学金	¥26,000
アルバイト	¥14,000
支出	¥80,000
部屋代	¥13,000
光熱費	¥4,000
風呂代	¥2,000(3日に一度)
食事代	¥10,000(昼・夜2食分)
書籍代	¥5,000
趣味・娯楽・交際費	¥46,000
残高	-¥10,000(借金で埋合わせ)
B氏の暗い学生生活 〈寮(4.5畳に2人) / 福岡県N市出身〉	
収入	¥46,000
支送り	¥35,000
アルバイト	¥11,000
支出	¥30,300
部屋代	¥6,300
食事代	¥15,000(昼・夜2食分)
書籍代	¥3,000
雑費	¥5,000
趣味・娯楽・交際費	¥1,000
残高	¥15,700(早速貯金にする)

昭和58(1983)年卒業アルバムより



平成23(2011)年

『第16回学生生活実態調査報告書』より





# 大学の入口と出口

TOPIC

## 入試制度の変遷

いつの時代も大学にとって学生の入学は最も大きな行事の一つであるが、入試制度は時代の流れとともに変化し、多様化してきている。

全国的な流れとしては、昭和24年の新制大学の誕生を機に、文部省は受験生の集中を避けるため、また、受験機会の増加のため、入試期間を一期校と二期校に区分けした。山口大学は中国地方では岡山大、島根大とともに一期校であった。(昭和26年度以降は二期校)昭和54年



一般入試 合格発表

からは、共通一次学力試験が始まり、大学独自に行う個別学力検査の成績と統合して入学者を選抜することとなったが、全ての国公立大学は一律に5教科7科目を利用することとされていたため、大学の序列化を招く結果となった。その後、平成2年からは大学入試センター試験へと移行され、大学・学部ごとに利用する教科・科目が異なるアラカルト方式を採用している。

現在、山口大学では一般入試(前期日程・後期日程)の他、AO入試、推薦入試、帰国生徒入試、社会人入試、私費外国人留学生入試を実施している。

一般入試では、受験機会の複数化のため、昭和62年から、各大学がA日程グループとB日程グループに分かれて試験を実施する「連続方式」が導入され、山口大学はA日程(経済学部のみA及びB日程)で実施したが、翌年からは、入学者選抜の日程を前期と後期に分離し、それぞれの日程ごとに募集人員を分割する、いわゆる「分離・分割方式」が経済学部で実施された。その後、平成9年には全学部が分離・分割方式へと移行した。

AO(アドミッション・オフィス)入試	筆記試験中心の選抜方法では見出せない資質を、様々な観点から総合的に評価しようとする目的で、平成13年から実施。各学部・学科・コースの求める学生像に基づき、提出書類、面接、講義等理解力試験を通して、入学志願者の資質を多面的・総合的に評価。入学定員の約1割がAO入試による入学者である。
推薦入試	大学入試センター試験の成績を利用する推薦入試(人文、医、工、共同獣医学部)と、利用しない推薦入試(教育、経済、理、農学部)を実施。
帰国生徒入試	外国の教育機関において学校教育を受ける日本人生徒を受け入れるため、昭和60年から実施。出願書類、小論文及び面接の結果により選抜される。
社会人入試	一度社会に出てから再び大学教育を受けようと考えている社会人を対象とし、昭和61年から実施。出願書類及び学部の定める教科、小論文、面接を総合して選抜される。
私費外国人留学生入試	国際交流等の推進の観点から、昭和58年から実施。平成26年現在、26ヶ国327名の外国人留学生が在籍している。

## おいでませ！受験生ーオープンキャンパスー

受験生や進学希望者に、パンフレット等では伝えきれない学内の雰囲気を経験してもらうため、各キャンパスで毎年オープンキャンパスが行われている。ミニ講義、研究室訪問、実験実習体験、在学生との意見交換など、様々なイベントが開催される。平成25年には、県内外から5,300人を超える参加があった。



平成25年のオープンキャンパスの様子

## キャリア教育と就職支援

山口大学では、教養教育・専門教育、そして正課外の様々な活動を通じて、自らの未来を切り開くことのできる人材、また、変化の激しい社会に対応しながら成果を出せる人材育成を目指して、キャリア教育と就職支援に力を入れている。

平成25年度からは、全学でキャリア教育を必修化し、1年次と3年次で段階に応じて、自らの将来について考え、学ぶ機会を設けている。また、学生が業界動向や会社・仕事をより深く、よりリアルに理解できるよう、経営者や人事担当者、企業などで活躍する卒業生をキャンパスに迎える学内業界・企業研究会も多く開催している。

就職支援室には、一人ひとりのキャリア形成を支援するため、職員の他、民間企業での経験豊富な就職アドバイザーやキャリア教育を担当する専任教員が常駐し、質問や相談に応じている。



「キャリアと就職」講義風景



学内業界・企業研究会の様子

# 学生と共に育む

## TOPIC

### おもしろプロジェクト —キミのやる気を応援します—

おもしろプロジェクトとは、学生が発見しはぐくんだ夢を形にするために、大学が資金を提供する「学生の自主的活動への資金支援制度」である。山口大学の「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」という教育理念のもと、平成8(1996)年に廣中平祐元学長が「かたちにする」ための資金提供を発案し、「おもしろプロジェクト」が誕生した。現在も学生の自主的活動のため資金提供を行っている。平成17年には文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、学外からも注目されている。

おもしろプロジェクトの大きな特徴の一つは、企画の内容に大きな制限がないことである。学生のふとした「おもいつき」を形にしてもらいたいという思いから制限を設けていない。また、最高で100万円という非常に高額な支援金額も特徴として挙げられる。

プロジェクトには独創性やユニークさが求められ、応募されたプロジェクトのうち、学内選考により採択可否が決まる。プロジェクトの実施には教職員が関与することはほとんどなく、学生だけの力で形にしていくのが通常である。「形にしよう」と試行錯誤することで、山口大学の教育理念と学生の主体的・創造的な学びが実現できると考えているためである。「失敗してもいい・思う存分やってみる」という哲学は、スタート時から現在まで変わらず引き継がれている。



おもしろプロジェクトが誕生した年度は、予算は組まれていなかったため、廣中元学長は実施予算の大半を自身のポケットマネーから出資して、学生の活動を支援したそうだよ！

#### 〈これまでの採択事例の一部〉



##### めだかの学校

地域の行事などに参加し交流を深め、地域と大学の架け橋になることを目標としている。



##### ソーラーカープロジェクト

ソーラーカーの設計、制作を通じて個々の工学的視野を広げ、ものづくりの楽しさを知ることを目的とする。実際にレースにも参加している。



##### 図書館カフェ

総合図書館の中にカフェを作るプロジェクト。おもしろプロジェクトの支援を受けて開店準備研究をし、現在は学生が運営している。



##### Code Orange

医学部のメンバーで構成され、心肺蘇生法をはじめとしたBLS(一次救命処置)の普及を目的として講習会の開催やイベントへの参加などの活動を行っている。

## ユ ー プ ラ ス YU-PRSS 学生広報スタッフ

YU-PRSS(Yamaguchi University Public Relations Student Staff)は、山口大学広報誌「YU-INFORMATION」や山口大学のWEBサイト内の「キャンパスライフ」のページなどの作成に携わる山口大学広報学生スタッフ。平成20年から活動している。名前には、「山大生のあなた(YOU)にも、そうでないあなた(YOU)にも、プラスになる情報を届けたい」との思いが込められている。現在20名のメンバーで広報活動を行っている。



山口大学広報誌の取材で岡学長にインタビュー

## キャンパスてくてくツアー

キャンパスてくてくツアーは、学生スタッフのガイドにより、地域の方に吉田キャンパス内をツアー形式で案内するというもの。「地域の方々に山口大学をもっと知ってもらおう」「大学と地域のつながりを深める」「学生がガイドすることによって地域と学生とのつながりを深める」ことを目的として、平成24年10月から活動をスタートした。

普段見ることのない大学の施設や、季節によって変わる構内の様子を散策しながら楽しむことができる。



(上)正門のハス池を案内  
(下)ガイドの学生たち

## 山口大学図書館学生協働

学生協働は、大学図書館の利用者でもある学生の視点を取り入れ、図書館のサービスを向上させることと、学生のキャリア教育支援を目的として、総合図書館で平成18年からスタートし、現在では医学部及び工学部図書館にも拡大している。活動内容としては、カウンターでの対応や利用者サポートなど図書館の一部の業務の他、展示など学生自らが発案・企画し行うものもある。学生と職員と一緒に業務に取り組むことで、相互に刺激し合いながら成長していくことを目指している。



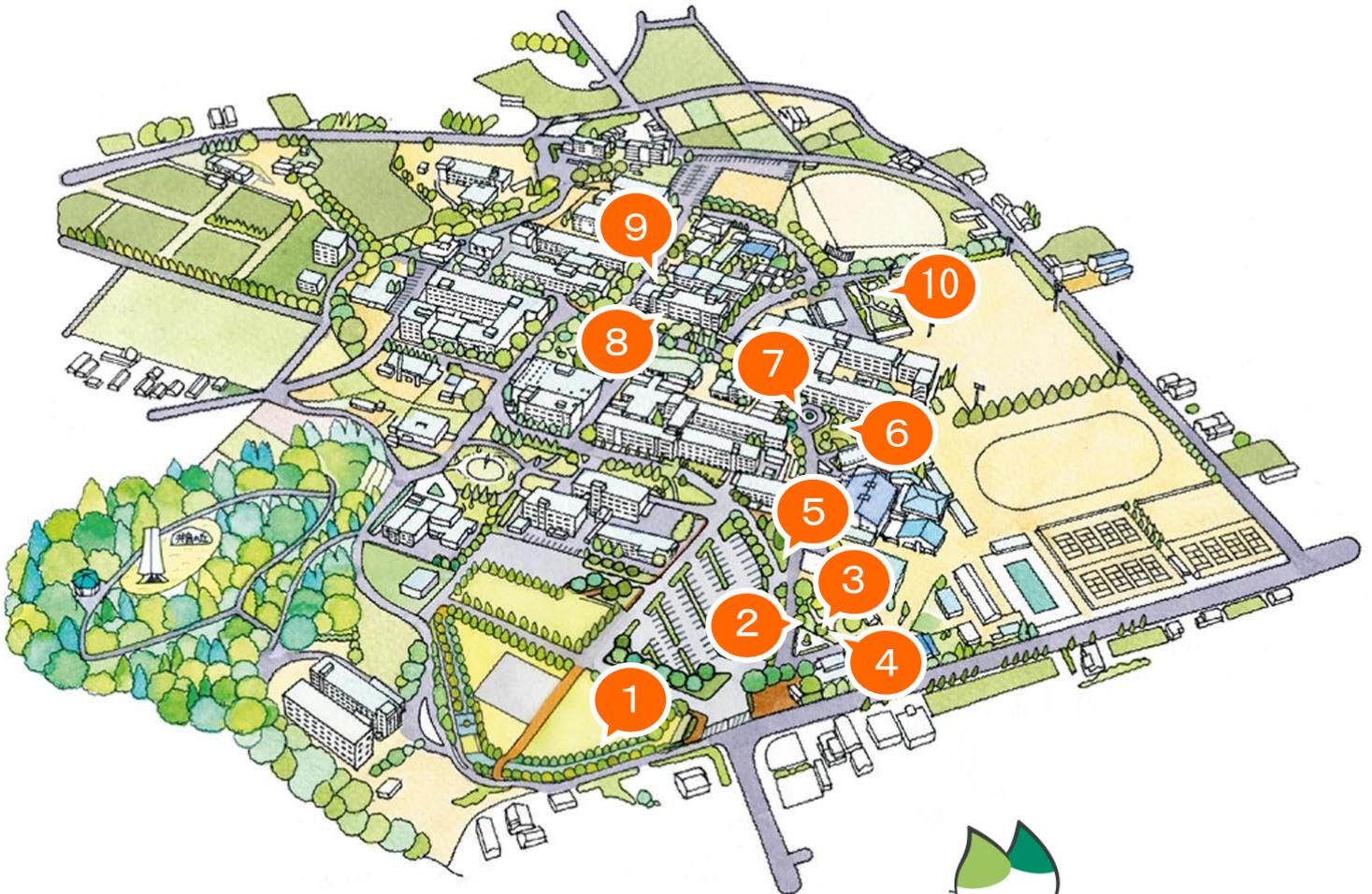
総合カウンターでの利用者サポート



新入生に図書館を案内

# 吉田キャンパス歴史散歩

附録



① ハス池 (大賀ハス)



② 創立30周年記念植樹の桜



③ 長州五傑記念碑



⑤ 創立 30 周年記念の時計台



④ ロンドン大学と山口大学の  
交流記念植樹



⑥ 皇太子殿下下行幸  
記念碑（教育学部）



⑦ カイツカイブキ  
（教育学部）



⑧-1 鳳陽寮歌碑  
（経済学部）



⑧-2 山都逍遥歌碑  
（経済学部）



⑧-3 山口高等商業学校校歌碑  
（経済学部）



⑧-4 経済学部と銀杏



⑨-1 石造台座  
（経済学部）

山口高等商業学校第4代鷺尾健治校長のブロンズ製胸像が載せられていたが、戦時中に供出され台座のみが残された。平成20年の東亜経済研究所の竣工に際し、台座正面に鷺尾校長のレリーフと、台座に萩ガラスを用いて山口高商の旧講堂の尖塔を模した照明器具を設置した。



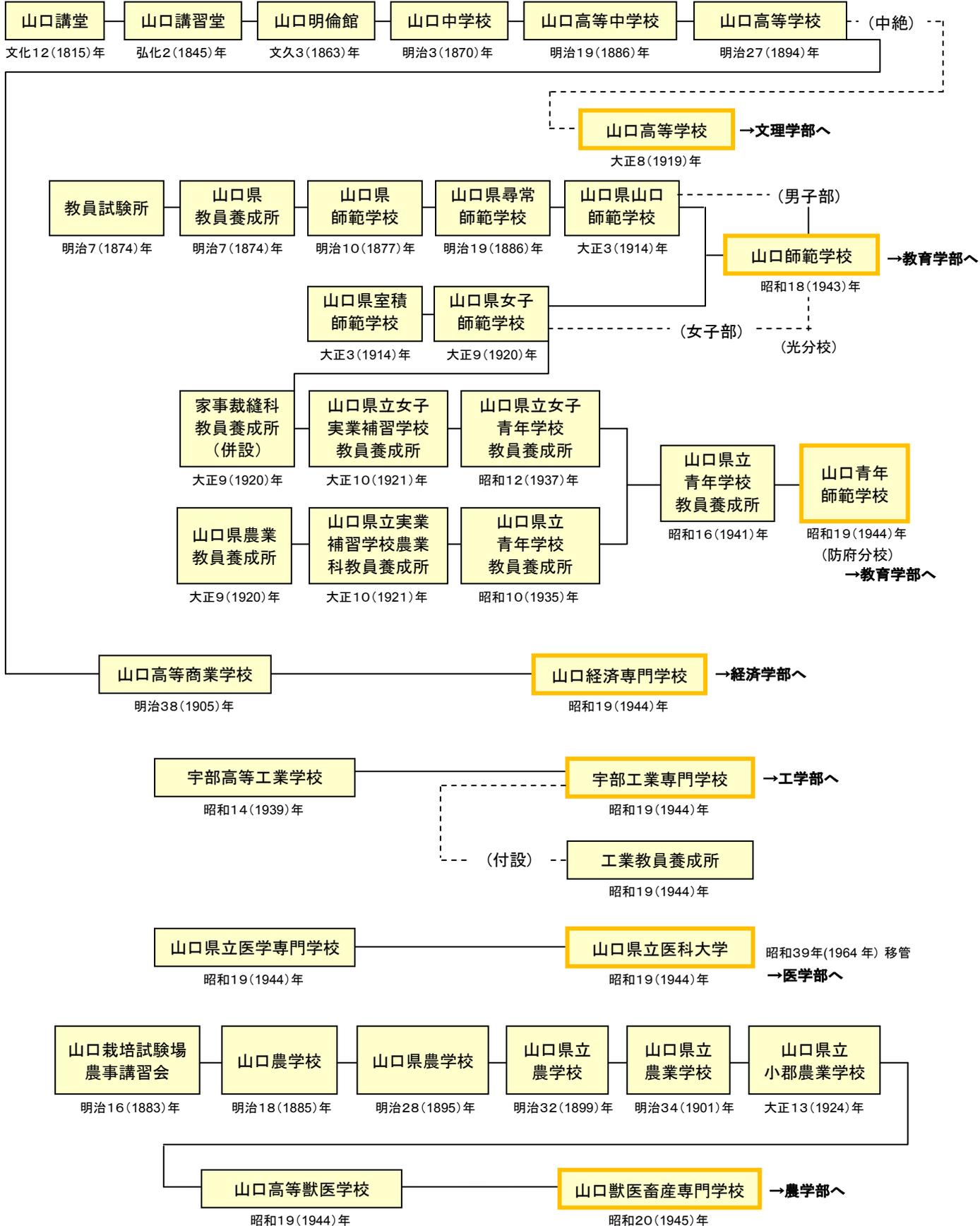
⑨-2 商品資料館（手前）  
東亜経済研究所（奥）

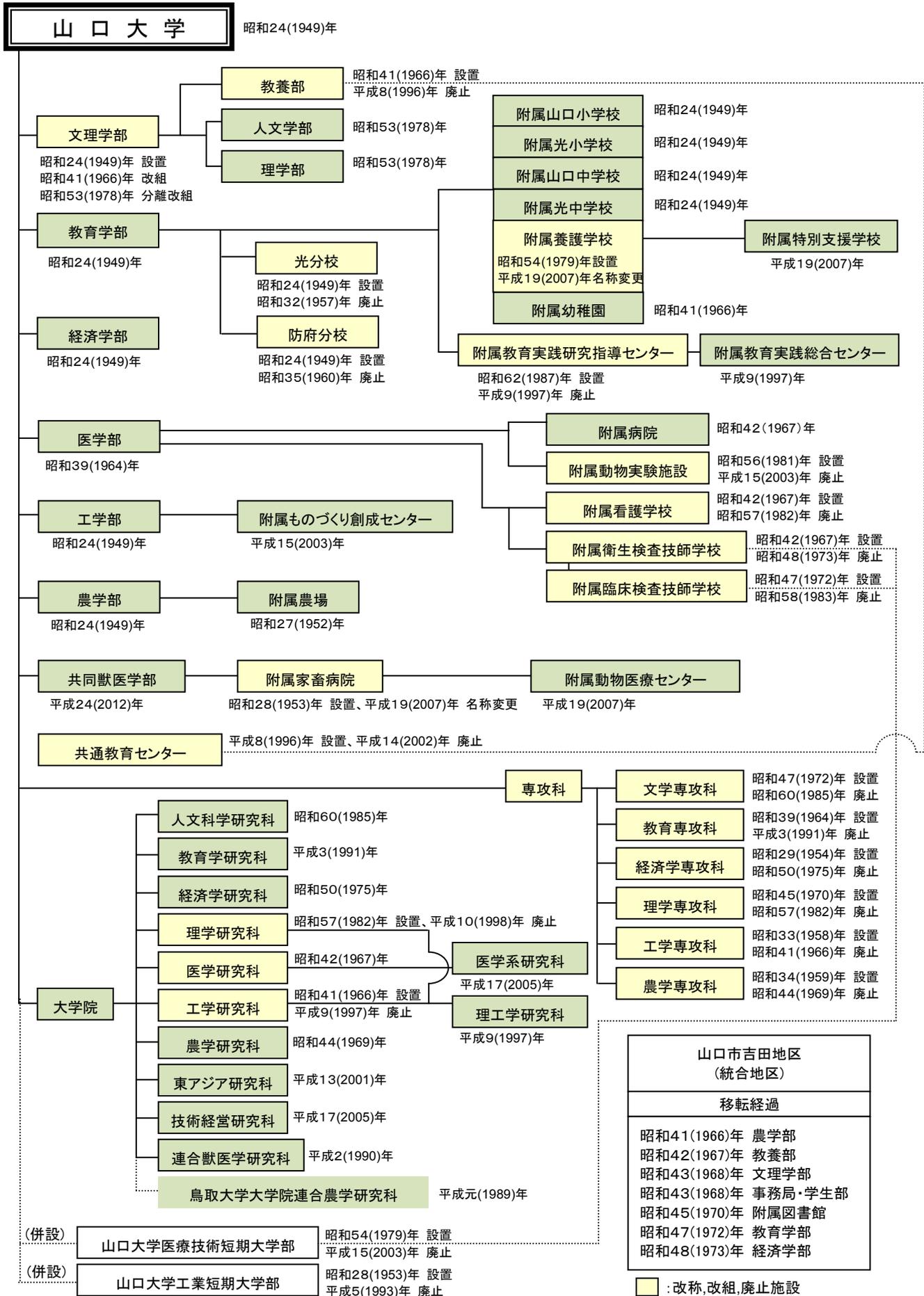


⑩ 遺跡公園

# 沿革

## 附録





# 学部・学科一覽 (平成26年度現在)

附録

## 学部

学部	学科・専攻・コース	定員
人文学部	人文社会学科	95
	言語文化学科	90
教育学部	学校教育教員養成課程	130
	実践臨床教育課程	20
	情報科学教育課程	30
	健康科学教育課程	30
	総合文化教育課程	30
経済学部	経済学科	90
	経営学科	130
	国際経済学科	55
	経済法学科	70
	観光政策学科	30
	商業教員養成課程	10
理学部	数理科学科	50
	物理・情報科学科	60
	生物・化学科	80
	地球圏システム科学科	30
医学部	医学科	107
	保健学科	120
工学部	機械工学科	90
	社会建設工学科	80
	応用化学科	90
	電気電子工学科	80
	知能情報工学科	80
	感性デザイン工学科	55
	循環環境工学科	55
農学部	生物資源環境科学科	50
	生物機能科学科	50
共同獣医学部	獣医学科	30

## 大学院

研究科	課程	専攻・講座・領域	定員
人文科学研究科	修士課程	地域文化専攻	4
		言語文化専攻	4
教育学研究科	修士課程	学校教育専攻	13
		教科教育専攻	28
経済学研究科	修士課程	経済学専攻	16
		企業経営専攻	10
医学系研究科	医学博士課程	システム統御医学系専攻	14
		情報解析医学系専攻	16
	博士前期課程	応用医工学系専攻	31
		応用分子生命科学系専攻	36
保健学専攻		12	
博士後期課程	応用医工学系専攻	14	
	応用分子生命科学系専攻	12	
	保健学専攻	5	
理工学研究科	博士前期課程	数理学専攻	16
		物理・情報科学専攻	20
		地球科学専攻	12
		電子デバイス工学専攻	42
		物質化学専攻	36
		機械工学専攻	36
		社会建設工学専攻	36
		電子情報システム工学専攻	41
		感性デザイン工学専攻	30
		環境共生系専攻	52
			博士後期課程
物質工学系専攻	8		
システム設計工学系専攻	9		
情報・デザイン工学系専攻	6		
環境共生系専攻	10		
農学研究科	修士課程	生物資源科学専攻	34
東アジア研究科	博士後期課程	東アジア専攻	10
技術経営研究科	専門職学位課程	技術経営専攻	15
連合獣医学研究科	博士課程	獣医学専攻	12
鳥取大学大学院 連合農学研究科	博士課程	生物生産科学専攻、生物環境科学専攻、 生物資源科学専攻、国際乾燥地科学専攻	17

※連合獣医学研究科は、山口大学、鳥取大学および鹿児島大学の協力による連合大学院である。

※鳥取大学大学院連合農学研究科は、鳥取大学、島根大学および山口大学の協力による連合大学院である。

年 表

	山口大学の出来事	学長	山口県内の出来事	世界および日本の出来事
1949 (昭和24)	山口大学発足 (文理・教育・附属学校・経済・工学・農学・附属図書館)(5.31) 初代学長松山基範着任(6.1) 本部仮事務室を経済学部内に設置(7.12) 第1回入学式(7.15) 山口大学学則制定(8.24) 開学式挙行(於経済学部講堂)(11.5)	松山基範	山口県立医科大学開設(4) 山口市から分離して小郡町が成立(11)	新制大学制度発足(5) 大学教授のレッドバージ始まる(9) 中華人民共和国成立(10) 湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞(11)
1950 (昭和25)	「山口大学学報」第1号発刊(2.21) 山口高等学校廃止(3.31) 開学記念式(於経済学部講堂)(6.1) 開学記念祭(11.2-12) 山口市主催、山口大学後援の学都祭挙行(12.1-5)		県営厚東ダム完成(3) 山口女子短期大学開校(山口市宮野)(5)	公職選挙法施行(5) 文化財保護法公布(5) 朝鮮戦争勃発(6) レッドバージ始まる(7)
1951 (昭和26)	山口師範学校・山口青年師範学校・山口経済専門学校・宇部工業専門学校廃止(3.31)		八海事件発生(1) 山口県第1回芸術文化奨励賞の授賞式(4)	第1回アジア競技大会、インドニューデリーで開催(3) 対日講和条約、日米安保条約調印(9)
1952 (昭和27)	山口獣医畜産専門学校廃止(3.31) 農学部附属農場開場(11.1)		岩国錦川で鵜飼開始(6) 山口カトリック教会「サビエル記念聖堂」献堂式(10)	琉球中央政府発足(4) 血のメーデー事件、死者2人、逮捕者1230人(5)
1953 (昭和28)	第1回卒業式(於経済学部講堂 3.28) 教育学部附属防府高等学校廃止(3.31) 大学本部を経済学部構内から新道庁舎に移転(6.26) 初の学長選挙により松山基範氏学長就任(7.1) 農学部附属家畜病院設置(7.1) 工業短期大学部併設(機械科・工業化学科)(8.1) 学生健康相談所開設(教育学部時養寮内)(9.11) 学生相談室開設(経済学部校内)(11.16)		佐波川大橋完工(9) 山口県地方史学会・山口県考古学会創立(11)	ソ連首相スターリン没(3) 日米友好通商航海条約調印(4) 朝鮮戦争休戦協定調印(7) ソ連、水爆保有を発表(8)
1954 (昭和29)	経済学専攻科・経済学部高等学校商業教員養成課程設置(4.1) 創立5周年記念祭(6.1-3) 文理学部が山口市糸米から後河原に移転(8.27) 湯川秀樹博士学術講演(12.30)		関門国道トンネル開通(2) 町村合併により美祿市、長門市、柳井市を設立(3)	米・ベキニ環礁で水爆実験、漁船第五福龍丸被爆(3) 防衛庁設置法・自衛隊法公布(6)
1955 (昭和30)	教育学部時養寮1棟焼失(2.28)		陸上自衛隊、山口市に駐屯(10) 秋吉台・北長門海岸を国定公園に指定(11)	アジア・アフリカ会議、バンドンで開催(4) 第1回原水爆禁止世界大会(広島)(8)
1957 (昭和32)	教育学部光分校廃止(3.31)		佐波川ダム完成(3) 山口県青少年保護育成条例公布(12)	南極観測隊、昭和基地を設営(1) ソ連、人口衛星スプートニク打ち上げ成功(10)
1958 (昭和33)	故松山基範学長大学葬(2.4) 工学部電気工学科・工学専攻科設置(4.1) 工学専攻科設置(機械工学専攻、鉱山学専攻、工業化学専攻、土木工学専攻)(4.1) 田中晃学長就任(6.14)	田中晃	関門国道トンネル開通(3)	米・人工衛星打ち上げ成功(1)、 東京タワー完成、1万円札発行(12)
1959 (昭和34)	農学専攻科(農学専攻・獣医学専攻)設置(4.1)		山口県文書館設立(4) NHK防府放送局からテレビ放送開始(6) ラジオ山口(現KRY)、テレビ局を開設(9)	キューバ革命(1)
1960 (昭和35)	教育学部防府分校廃止(3.31) 鈴木大拙公開講演会(教育学部講堂)(10.21)		香川学園短大(現宇部短大)開校(4) 萩市三島MP学術調査始まる(8)	
1962 (昭和37)	工学専攻科に電気工学専攻科設置(4.1) 市川禎治学長就任(6.14)	市川禎治	国立宇部工業高等専門学校開校(4) 下関市立大学開校(4)	
1963 (昭和38)	工学部生産機械工学科設置(4.1)		下関農林省水産講習所、水産大学校として発足(1) 第18回国民体育大会夏季大会開催(9)	ケネディ大統領暗殺(11)
1964 (昭和39)	山口県立医科大学を移管して医学部設置(4.1) 教育学部教育専攻科設置(4.1) 工学部鉱山学科を資源工学科と改称(4.1) 第162回評議会において平川地区に統合移転を決定(9.9)		山口-東京間電話即時通話開始(3)	東海道新幹線開通(10) 東京オリンピック開会(10)
1965 (昭和40)	第1回山口大学名誉教授称号授与式(3.23) 工業短期大学部電気科増設(4.1) 経済学部創立60周年記念式(於経済学部講堂)(12.10)		柳井-松山間にフェリー就航(6) 青海大橋完工(10)	朝永振一郎、ノーベル物理学賞を受賞(10)
1966 (昭和41)	文理学部を改組して教養部設置(4.1) 大学院工学研究科設置(4.1) 工学専攻科廃止(4.1) 教育学部養護学校教員養成課程設置(4.1) 教育学部附属幼稚園設置(4.1) 工業短期大学部土木科増設(4.1) 統合移転用地買収完了(4.30) 農学部移転完了(10.25)	市川禎治	県営宇部空港開港(7) 県営宮野ダム完成(11)	日本でメートル法完全施行(4) 中国文化大革命始まる(5) ビートルズ来日(6月30日から3日間日本武道館で公演)
1967 (昭和42)	教養部移転完了(3.31) 農学部農芸化学科設置(4.1) 大学院医学研究科設置(4.1) 大学院工学研究科生産機械工学専攻設置(4.1) 医学部附属病院設置(6.1) 医学部附属看護学校、医学部附属衛生検査技術学校設置(6.1) 吉田遺跡調査団発足(6.8)		宇宙通信衛星基地、山口市仁保に起工(12)	欧州共同体(EC)発足(7) 東南アジア諸国連合(ASEAN)発足(8) 公害対策基本法公布(8)
1968 (昭和43)	福利厚生施設として白石荘開設(2.15) 山口県立医科大学・大学院廃止(3.31) 文理学部移転完了(10.24) 事務局、学生部移転完了(11.2)		県農業試験場完成(3) 山口芸術短期大学が開校(4) 徳山-竹田津に周防灘フェリー就航(10)	郵便番号制度実施(7) 札幌医大で日本初の心臓移植手術(8) 川端康成、ノーベル文学賞受賞(10)
1969 (昭和44)	農学専攻科廃止(3.31) 工学部化学工学科設置(4.1) 大学院農学研究科(農学専攻、獣医学専攻)設置(4.1) 工業短期大学部学科制となる(4.1) 「山大広報」第1号発刊(12.15)	田中弘道 (学長事務取扱)	国際電電、山口衛星通信所開所式(5) 宇部に初の大気汚染注意報がでる(6)	アポロ11号、月面着陸(7)

	山口大学の出来事	学長	山口県内の出来事	世界および日本の出来事
1970 (昭和45)	附属図書館落成式(3.10) 理学専攻科設置(4.1) 保健管理センター設置(4.17)	力武一郎 (学長事務取扱)	テレビ山口本放送開始(4) 下関-釜山間関釜フェリー就航(6) 南陽町から新南陽市へ(11)	国産初の人工衛星打ち上げ成功(2) 廣中平祐フィールズ賞受賞(9) 沖縄、初の国政選挙参加(11)
1971 (昭和46)	一部学生による本学学長室及び事務局長室占拠(2.23-3.21) 大学院農学研究科農芸化学専攻設置(4.1) 力武一郎学長就任(4.1) (吉田地区)放射性同位元素総合実験室設置(4.13)	力武一郎	私立徳山大学の開設決定(2)	沖縄返還協定調印(6) 環境庁発足(7)
1972 (昭和47)	山口大学電子計算機室設置(3.14) 文学専攻科設置(4.1) 教育学部移転完了(8.4)		欽明路バイパス開通(3) 県、公署局発足(4)	山陽新幹線岡山まで開通(6) 田中角栄「日本列島改造論」(6)
1973 (昭和48)	経済学部移転完了(1.13) 中村正二郎学長就任(4.1) 山口大学統合移転記念式挙行(11.18)	中村正二郎	山口県立図書館移築(5) 出光石油化学徳山工場が爆発炎上(7) 関門橋完成(10) 維新百年記念公園完成(11)	江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞(10)
1974 (昭和49)	工業短期大学部情報処理工学専攻増設(4.1) 医学部創立30周年記念式(於渡辺翁記念館)(11.22)		県公害センター開設(1) 徳山工業高等専門学校開設(1) 中国自動車道(小月-小郡間)開通(7)	米、ニクソン大統領ウォーターゲート事件で辞任(8)
1975 (昭和50)	教育学部幼稚園教員養成課程設置(4.1) 工学部電子工学科設置(4.1) 大学院経済学研究科(経済学専攻)設置(4.1) 教員養成百周年記念式典(10.19)		山口女子大学開校(短大から4年制へ)(4) 山口で初の原爆死没者追悼平和式典開(9)	新幹線、博多まで全線開通(3) ベトナム戦争終結(4) 廣中平祐、文化勲章受賞(11)
1976 (昭和51)	大学院工学研究科化学工学専攻設置(4.1)			ロッキード事件発覚(2)
1977 (昭和52)	埋蔵文化財資料館竣工(3.28) 経済学部国際経済学科設置(4.1) 故中村正二郎学長大葬(12.19)	戸田光敬 (学長事務取扱)	県原発対策室を設置(8)	大学入試センター発足(5) 日航機ハイジャック事件(9)
1978 (昭和53)	小西俊造学長就任(3.25) 文理学部を改組して、人文学部、理学部設置(6.17)	小西俊造	県農業大専科開校(4)	国連、初の軍縮特別会総会開催(5) 成田空港開港(5)
1979 (昭和54)	大学院工学研究科電子工学専攻設置(4.1) 教育学部附属看護学校設置(4.1) 山口大学創立30周年記念式典(於経済学部大講義室)(6.1) 医療技術短期大学部設置(10.1)		県内海水産試験場竣工(6) 山口線にSL-C57「貴婦人」が復活(8) 県立美術館閉館(10)	第2次石油危機(1) 第1回国公立大学共通1次学力試験実施(1.13-14) 米スリーマイル島で原子力発電所事故(3)
1980 (昭和55)	山口大学標章(シンボルマーク)制定(4) 経済学部経済法学科設置(4.1) 工学部建設工学科設置(4.1)		宇部空港にジェット機就航(4) 山口市にパークロード完成(7)	モスクワ五輪、日本を含め59カ国ボイコット(7) イラン-イラク戦争勃発(9)
1981 (昭和56)	医学部附属動物実験施設設置(4.1) 情報処理センター設置(7.28) 山东大学から初の交換留学生来学(12.23)	小西俊造		福井謙一、ノーベル化学賞受賞(10)
1982 (昭和57)	医学部附属看護学校廃止(3.31) 理学専攻科廃止(3.31) 電子計算機室廃止(3.31) 大学院理学研究科設置(4.1) 山口大学30年史発行(12.1)		中国電力の上関原発建設計画が表面化(6) 県、中国山東省と友好協定締結(8)	500円硬貨発行(4) テレホンカード使用開始(12)
1983 (昭和58)	医学部附属臨床検査技師学校廃止(3.31) 山口大学と山东大学との学術交流協定締結(6.2) 工業短期大学部創立30周年記念除幕式並びに記念植樹(8.1)		県教育会館完成、県生涯教育センター開所(1) 萩焼の11代三輪休雪、人間国宝に指定(3)	青函トンネル開通(1) 中国自動車道が全線開通(3)
1984 (昭和59)	大学院工学研究科建設工学専攻設置(4.1) 粟屋和彦学長就任(5.16) 医学部創立40周年記念式典(9.23)	岩城秀夫 (学長事務取扱)	県スポーツ文化センター竣工(5) 県庁舎竣工	
1985 (昭和60)	文理学部廃止(3.31) 大学会館設置(4.1) 第1回大学院人文科学研究科入学式(4.25)	粟屋和彦	エフエム山口本放送開始(12)	東北・上越新幹線上野発着開始(3) 日航ジャンボ機、御巢鷹山に墜落(死者520人)(8)
1986 (昭和61)	旧制山口高等学校創設100周年記念会(大学会館)(9.10)		県流通センター完成(4)	ソ連チェルノブイリ原発事故発生(4) 男女雇用機会均等法施行(4)
1987 (昭和62)			東京理科大学山口短大開校(4)	NTT株上場(初値160万円)(2) 利根川進、ノーベル医学生理学賞受賞(10)
1988 (昭和63)	国際交流会館設置(4.1)		宇宙通信山口局完成(9)	青函トンネル開業(3) 瀬戸大橋開通(4) リクルート事件発覚(6)
1989 (平成元)	教育学部総合文化教育課程設置(4.1) 鳥取大学大学院農学研究科に参加(4.1) 山口大学創立40周年記念巡回講演会(11/7-29萩市、下関市、岩国市、宇部市、山口市)		大内塗が国の伝統工芸品に指定(4) 国立山口徳地少年自然の家開設(10)	昭和天皇崩御、新元号「平成」(1) 消費税(3%)の導入(4.1) ベルリンの壁崩壊(11)
1990 (平成2)	大学院農学研究科獣医学専攻廃止(3.31) 大学院連合獣医学研究科設置(4.1) 三分一政男学長就任(5.16) 工学部全学科及び工業短期大学部、大学院工学研究科を改組(10.1) 工学部の全学科及び工業短期大学部改組(10.1)	三分一政男	山口県国際交流協会設立(1)	初の大学入試センター試験(1) 大阪で「花の万国博覧会」開催(9) 統一ドイツ誕生(10)
1991 (平成3)	大学院教育学研究科設置(4.1) 地域共同研究開発センター設置(4.12)		山口市のサビエル記念聖堂全焼(9) 台風19号、県下で猛威(9)	湾岸戦争突入(1) 雲仙普賢岳で大火砕流発生(6) ソ連邦消滅、独立国家共同体へ(12)
1992 (平成4)	機器分析センター設置(4.10) 週休2日制の施行に伴う週5日授業の導入(5.12)		県史編纂室設置(4) 山陽自動車道開通	欧州連合(EU)結成(2) 国家公務員完全週休2日制(5)
1993 (平成5)	工業短期大学部廃止(3.31) 人文社会学科、言語文化学科を設置(4.1) 村上憲学長就任(5.16)	村上憲	宇部-札幌便就航(5) YAB山口朝日放送開局(10) 三隅町香月美術館開館(10)	Jリーグ開幕(5)
1994 (平成6)	道伝子実験施設設置(6.24) 「医心館」開館記念式(9.14)		中原中也記念館オープン(2) 山口市で県内観測史上最高の38.4度を観測(7)	松本市でサリン事件発生(6) 北朝鮮金正日成主席没(7) 関西国際空港開港(9) 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞(11)

	山口大学の出来事	学長	山口県内の出来事	世界および日本の出来事
1995 (平成7)	理学部の全学科改組(4.1) 総合情報処理センター設置(4.1) 大学院経済学研究科企業経営専攻設置(4.1) 経済学部「商品資料館」竣工記念式(4.26)	村上憲	山口市、西京スタジアム完成(5)	阪神淡路大震災発生(死者6300人 1.17) 地下鉄サリン事件(3)
1996 (平成8)	教養部廃止(3.31) 工学部感性デザイン工学科設置(4.1) 共通教育センター設置(4.1) 廣中平祐学長就任(5.16) 「山口大学おもしろプロジェクト」初の公募開始(9.1) ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置(9.10)	廣中平祐	第1回中原中也賞授賞式(2) 新サビエル記念聖堂起工(3) 山口県立秋美術館・浦上記念館完成(5) 海峡メッセ下関完成(7)	O-157集団感染が発生(5)
1997 (平成9)	附属教育実践総合センター設置(4.1) 第1回大学院理工学研究科入学式(4.21) 附属図書館の日曜開館実施(4.1)		山口市「リサイクルプラザ」完成(1) 宇部-那覇便初フライト(7)	中国鄧小平死去(2) 消費税5%始まる(4) 香港、155年ぶりに中国へ返還(7) ダイアナ元皇太子、交通事故死(8)
1998 (平成10)	大学院理工学研究科環境共生工学専攻(博士課程)(独立専攻)設置(4.1)		秋吉台国際芸術村が開村する(8)	明石海峡大橋が開通(4) 日本初の火星探査機「のぞみ」が打ち上げに成功(7)
1999 (平成11)	山口大学同窓会連合の結成(1) 山口大学創立50周年記念式典(4.23) イコール・パートナーシップ委員会発足(5.11) 第2学生食堂竣工記念式典(12.1)	廣中平祐		欧州通貨統合による単一通貨ユーロ誕生(11) 茨城県東海村で臨界事故発生(9)
2000 (平成12)	時間学研究所開設(4.1) 医学部保健学科設置(10.1)		角島大橋完成(11)	紫色部を肖像とした2千円札の発行(7) 白川英樹、ノーベル化学賞受賞(10)
2001 (平成13)	東アジア研究科新設(4.1) アドミッションセンター設置(4.25) 総合研究棟(吉田)竣工記念式典(11.28)		山口きらら博開催(7.14-9.30)	中央省庁再編成(1) 情報公開法施行(4) 米国で同時多発テロ(9) 野依良治がノーベル化学賞受賞(10)
2002 (平成14)	メディア基盤センター、大学教育センター、留学生センター、産学公連携・創業支援機構設置(4.1) 加藤紘学長就任(5.20)	加藤紘		住民基本台帳ネットワークシステムスタート(8) 小柴昌俊ノーベル物理学賞、田中耕一ノーベル化学賞受賞(10)
2003 (平成15)	医療技術短期大学の廃止(3.31) ビジネスインキュベーション施設、総合科学実験センター、知的財産本部、工学部附属ものづくり創成センター、エクステンションセンター設置(4.1)		山口情報芸術センター・山口市立図書館開館(11)	宮崎駿監督「千と千尋の神隠し」が第75回アカデミー賞長編アニメ映画賞を受賞(3)
2004 (平成16)	新しいシンボルマーク・シンボルカラーの制定(1.5) 国立大学法人化(4.1) 国際センター、研究推進戦略室(URA)設置(4.1)		山口県の養鶏場で鳥インフルエンザの発生を確認(1) 錦帯橋架け替え工事完了(3)	アテネオリンピック(8) 新札発行(1000円札、野口英世、5000円札：樋口一葉)
2005 (平成17)	大学院技術経営(MOT)研究科新設(4.1)		県央部1市4町合併により新「山口市」誕生(10.1)	愛・地球博(3-9) JR福知山線脱線事故(4.25)
2006 (平成18)	「開放授業」開始(4) 長州五傑記念碑除幕式(4.26) 「大学コンソーシアムやまぐち」設置(5.31) 丸本卓哉学長就任(5.16)	丸本卓哉	下関市のJR下関駅が放火により全焼(1) 第21回国民文化祭・やまぐち2006開催(11)	ライブドアショック(1) 新北九州空港開港(3) 第1回ワールド・ベースボール・クラシックで日本が優勝(3)
2007 (平成19)	動物医療センター改称(1.1) 「山口大学憲章」制定(2.15) 「山口大学まんじゅう」発売			4月29日「昭和の日」、5月4日みどりの日に日本の月探査衛星「かぐや」打ち上げに成功(9) 郵政民営化スタート(10)
2008 (平成20)	事務局1号館改修(3) 山口大学東亜経済研究所竣工(5.14)			iPhoneが日本で発売開始(7) 南部陽一郎、小林誠、益川敏英、ノーベル物理学賞、下村脩、ノーベル化学賞受賞(10) 米・オバマ大統領誕生(11)
2009 (平成21)	山口大学ブランド「純米大吟醸長州学舎」誕生(3.9) 常盤女子寮竣工(3.23)		豪雨により防府市で土砂災害発生(7.21)	政権交代(自由民主党・公明党→民主党・社民党・国民新党)(8)
2010 (平成22)	「共育の丘」およびモニュメント「Gravitation」完成(4) 東アジア研究科・経済学研究科棟が完成(5) 動物医療センター改修記念式典(6.1) 放送大学と包括的連携協力に関する協定を締結(11.15)			小惑星探査機「はやぶさ」が帰還(6) 参院選挙で民主党が大敗、ねじれ国会に(7) 鈴木章、根岸英一がノーベル化学賞受賞(10)
2011 (平成23)	山口県ドクターヘリ運用開始(1.21) 吉田寮1号棟の改修完了(3.29)	丸本卓哉	山口国体・山口大会(10)	東日本大震災発生(3.11) 九州新幹線博多駅～鹿児島中央駅全通(3) テレビ放送が地デジに移行(7)
2012 (平成24)	共同獣医学部創設(4.1) 第1回創基200周年記念基幹シンポジウム開催(6.1) 手術支援ロボット「ダヴィンチ」を医学部附属病院に導入(8.29) 山口大学マスコットキャラクター「ヤマミィ」初登場(11.22)		岩国錦帯橋空港が開港(12)	東京スカイツリー開業(5) 山中伸弥がノーベル医学・生理学賞受賞(12) 政権交代(民主党・国民新党→自由民主党・公明党)(12)
2013 (平成25)	附属山口中学校男子硬式テニス部が団体戦で全国優勝(2) 創基200周年記念「駐日ベルギー共和国特命全權大使による講演会」開催(5.30) 「世界一大きな郵便ポスト」ギネス記録認定(7.25) 山口大学創基200周年記念 第1回山口大学ホームカミングデーを開催(11.23)		山口島根豪雨(7.28)	安倍首相がTPPへの交渉参加を表明(3) 公職選挙法が改正されネット選挙解禁が決定(4) NHKと民放各局、東京スカイツリーからの本放送開始(5) 富士山が世界文化遺産に登録決定(6)
2014 (平成26)	総合図書館増築・改修竣工記念式典(3.18) 山口講堂跡記念碑除幕式(3.25) 岡正朗学長就任(4.1)	岡正朗		国家安全保障会議の事務局である国家安全保障局が発足(1) 冬季オリンピック(2.7-23 ロシアソチ)

## 参考資料

- ・ 山口大学三十年史 / 山口大学30年史編集委員会編 山口大学 1982
- ・ 山口大学五十年史 / 山口大学50年史編集委員会編 山口大学 1999
- ・ 学制百年史 / 文部省 1972
- ・ 奮発震動の象あり:防長教育史の人びと / 松野浩二著 山口鳳陽会 2005
- ・ 山口高等商業学校沿革史 / 山口高等商業学校 1940
- ・ 花なき山の… / 鳳陽会編 2005
- ・ 角笛 : 山口獣医畜産専門学校第4回卒業五十周年記念誌 / 山口獣医専第四回卒業角笛会 2000
- ・ 山口大学工学部五十年 / 山口大学工学部創立五十周年記念事業会記念史部会編 1990
- ・ 山口大学工学部創立40周年記念写真集 / 常盤工業会 1979
- ・ 常盤台今昔 : 山口大学工学部創立65周年記念 / 梶返昭二編著 常盤工業会 2005
- ・ 三十年史 / 山口大学工業短期大学部創立30周年記念事業実行委員会 1983
- ・ 山口大学医学部創立三十周年記念誌 / 山口大学医学部創立30周年記念事業委員会 1975
- ・ 山口大学医学部創立50周年記念誌 / 山口大学医学部創立50周年記念事業会 1995
- ・ 霜仁会歴史誌 : 山口大学医学部創立五十周年記念 / 霜仁会 1994
- ・ 山口医療技術短期大学部10年史 / 山口医療技術短期大学部10年史編集委員会 1990
- ・ 山口大学体育会30周年史 / 山口大学体育会 1984
- ・ よくわかる国立大学法人会計基準 -実践詳解- 第2版 / 白桃書房 2004
- ・ 新しい「国立大学法人」像について / 国立大学等独立行政法人化に関する調査検討会議 2002
- ・ 学生生活実態調査報告書 / 山口大学学生部
- ・ 国勢調査報告 / 総理府統計局編
- ・ 平成19年住宅・土地統計調査 / 総務省統計局編
- ・ その他 山口大学学報、YU インフォメーション、大学要覧、学生便覧等、学内刊行物及び山口大学WEBサイト

# 山口大学憲章

## はじめに

---

山口大学は、1815(文化 12)年、長州藩藩士・上田鳳陽によって創設された私塾・山口講堂を前身とし、明治・大正期の学制を経て、1949(昭和 24)年には、平和と繁栄を願い、地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。そして2004(平成 16)年、国立大学法人山口大学が設置する国立大学となりました。

いま、新たな大学づくりに踏み出すにあたり、ここに「山口大学憲章」を掲げ、学生・教員・職員の三者が一体となって、理念の共有と目標の実現をめざします。

## I 基本理念

---

### 1 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

### 2 共同・共育・共有精神の涵養

私たち山口大学は、共に力を合わせ、共に育み合い、共に喜びを分かち合います。この共同・共育・共有の精神を“山大スピリット”として涵養します。

### 3 公正・平等・友愛の尊重

私たち山口大学は、“山大スピリット”による他者への配慮と自らを律する倫理観のもとに、あらゆる偏見と差別を排し、公正と平等と友愛の精神を尊重します。

## II 教育の目標

---

### 1 専門性と社会性の育成

私たち山口大学は、地域の基幹総合大学として、各学部・研究科の特性を活かし、個性あふれる専門性と社会性に富んだ人材を育みます。

### 2 自己啓発・自己研鑽・自己管理の徹底

私たち山口大学は、自己啓発・自己研鑽に努め、自己管理能力を身につけた人材を育みます。

### 3 知識社会に応える能力の醸成

私たち山口大学は、地域社会および国際社会の発展と平和の実現に貢献するために、21世紀の知識社会における課題探求と問題解決の能力を持った人材を育みます。

## III 研究の目標

---

### 1 先進的な研究を社会に還元

私たち山口大学は、基礎的・学術的研究および社会が直面する課題の克服と解決に役立つ研究を重視し、総合大学の特性を活かし、先進的かつ長期的な視野に立った研究を進め、その成果を社会に還元します。

### 2 学際的な研究体制の構築

私たち山口大学は、人文科学、社会科学、自然科学、生命科学などの学問分野の独自性を尊重しながら、これら諸分野の連携を通して、21世紀の時代にふさわしい学際的な研究体制を構築します。

### 3 研究活動の透明性と説明責任の遵守

私たち山口大学は、研究者相互の交流を基盤に、山口大学を主体とする共同研究体制を構築します。その研究過程と研究成果は広く社会に発信し、説明責任を果たします。

## IV 私たちの責務

---

### 1 新たな価値の創出

私たち山口大学は、人間と人間、人間と自然、人間と科学とが調和する新たな価値の創出をめざします。

### 2 社会が抱える問題解決への寄与

私たち山口大学は、20世紀の時代が繁栄と豊かさをもたらす一方で、自然環境の破壊や貧困・飢餓・戦争など、多くの社会問題が表出した時代であったことを認識し、21世紀の今日にあっては、これらの矛盾の解決のために英知と勇気を役立てます。

### 3 地域社会の発展と国際社会への貢献

私たち山口大学は、心豊かな教養人と優れた専門的知識・技術を持った人材を育み、地域社会の発展と国際社会の平和に貢献し、人類の幸福に寄与します。

## 終刊の辞

山口大学は、平成27(2015)年5月30日、創基200周年記念を祝います。文化12(1815)年、長州藩士・上田鳳陽によって山口の地に創設された私塾「山口講堂」が本学の礎です。そして本学は全国の国立大学のなかで、三番目に古い歴史を刻んできました。

以来、明治・大正期の学制を経て、昭和24(1949)年に新制大学として、新たなスタートを切り、今日に至っています。私たち“山口大学人”は、200年の歴史を糧に、これからの200年を見据え、時代の要請と地域の期待に応えるため、全力を尽くしていきます。

さて、近代日本の幕開けにあって、厳しい歴史の波に晒されていた長州の人々は、それゆえに知の力によって、未来に向けて重い扉を押し開きました。そうした先達の営みを振り返るため創刊された『山口大学の来た道』は、第5号をもって終刊します。ここで記録された文面や写真から、時代に翻弄されながらも、知の力によって、社会や地域に貢献する人材を輩出し続けた、本学の歩みを読み取って頂けたのではないのでしょうか。

そこでは、大学の歴史を通して、近代日本社会の動きが浮き彫りにされ、大学を取り巻く環境が著しく変容してきたことも実感されたのではないかと、思います。私たち編集を担った者たちも、教育を通して優れた人材を世に送り出し、研究によって社会の発展に寄与し、地域貢献によって多くの人々と繋がっていくことが、私たち“山口大学人”の使命であることを、あらためて確認することができました。

これからの未来は、文字通り不透明な時代かも知れません。それだけに、200年の歴史のなかで培ってきた、「発見し、はぐくみ、かたちにする」知的探求力が、文字通り活かされる時代に思います。これからの時代にあって、まさに本学200年の歴史が試される時代がやってくるのだ、と考えます。『山口大学の来た道』は終刊しますが、それは同時に〈山口大学が歩む道〉の始まりを意味します。

私たちは、200周年を迎えるにあたって、決意を新たにしています。先達たちの志をしっかりと受け継ぎ、未来に繋げ、日本と世界にあって、本学の役割が一層期待されるために邁進することを。そして文教都市山口の最高学府として、また地域の基幹総合大学として優れた人材を輩出することを通して、郷土山口の発展に貢献することを。

また、アジア大陸にも東南アジアにも近接の地であり、歴史上深い繋がりを持つ山口大学が、21世紀以降の先端大学として、自らの役割を自覚しながら、平和と安定の礎たらんとする熱意をもって、奮闘していくことを。

『山口大学の来た道』編集委員長  
瀬戸 厚



吉田キャンパス



小串キャンパス



常盤キャンパス

### 「山口大学の来た道」

- 第1巻 山口講堂から山口中学へ(平成23年2月)  
(平成25年7月改訂)
- 第2巻 山口中学校から県内初の高校創立へ(平成23年9月)
- 第3巻 山口高等商業学校から専門学校誕生まで(平成25年5月)
- 第4巻 山口大学誕生(平成26年2月)
- 第5巻 新制大学としての歩み(平成26年8月)

### 「山口大学の来た道」編集委員会

編集委員長 瀬織 厚

副委員長 山内 直樹

#### ■制作スタッフ(五十音順)

大田 直子	岡田 隆
金重 幾久美	汐除 ちえみ
撰田 直樹	堂迫 妙子
日高 友江	前坂 祥子
山形 祐美子	和田 祐子



200th  
Anniversary  
YAMAGUCHI UNIVERSITY

「志」つなぎ伝える  
二百年

創基 200 周年

## 山口大学の来た道 5

—新制大学としての歩み—

---

2014年 発行 山 口 大 学  
企画・編集 山口大学総合図書館内  
「山口大学の来た道」編集委員会